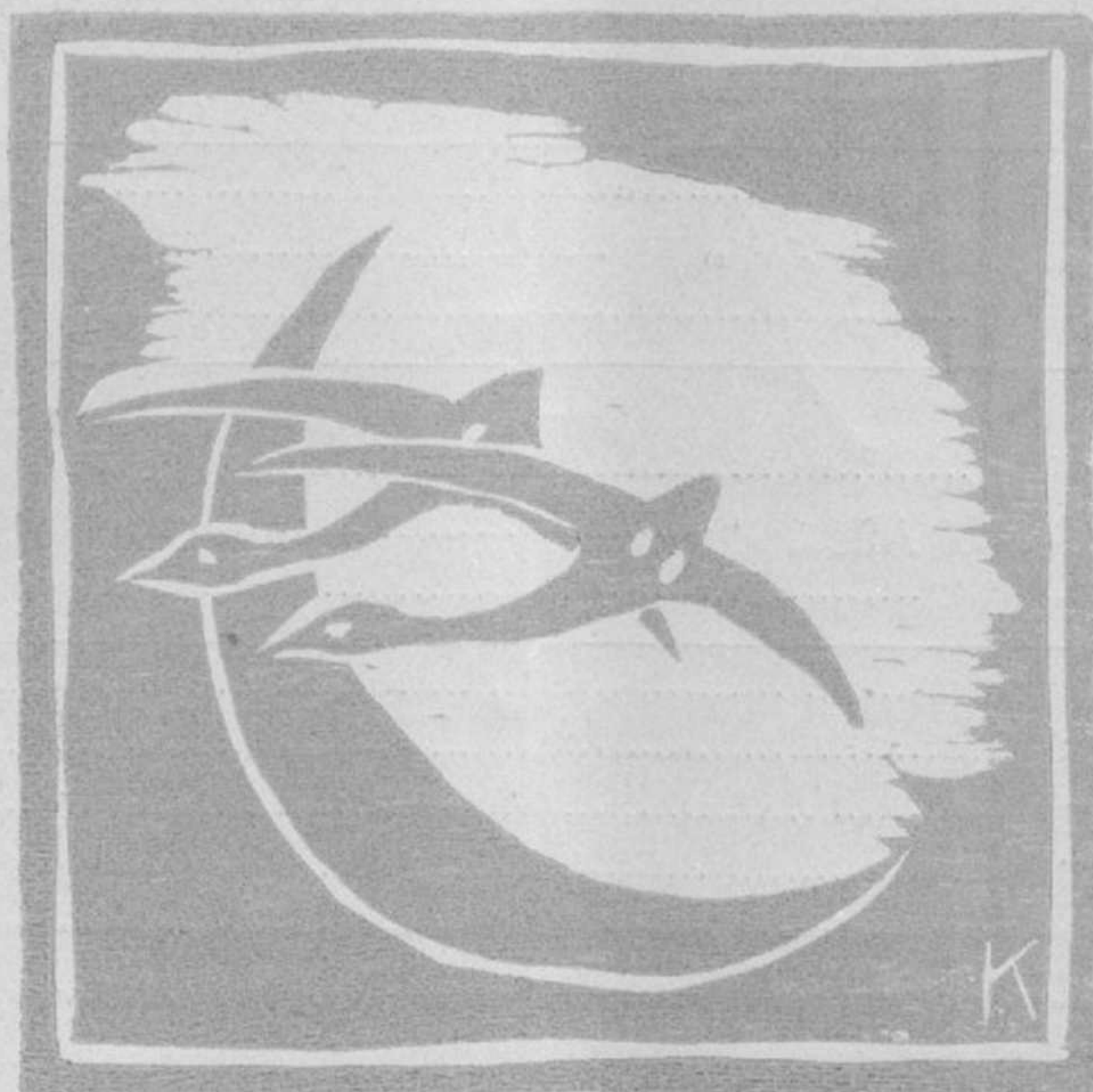
JARO XI, N-RO 9 SEPTEMBRO 1930

La Revuo Orienta



JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

ŜIN'OGAŬAMAĈI III, UŜIGOME, TOKIO



目　　次

編輯者　露木清彦

★ 初等科講習會 ★

9月1日(月)——29日(月)
每週月、木曜日 (9回)
19時——1時間半

會費　2圓 (教材共)
講師　松本清彦氏
場所　當學會階上講習室

★ 中等科講習會 ★

9月5日より每週金曜日19時より
會費每月　50錢

★ 例會兼研究會 ★

每水曜日19時より
用書：Fabeloj de Andersen (II)
〔會費不用〕

★ 會　話　會 ★

九月二十日(第三土曜日)午後七時より。
丸の內鐵道クラブにて。
（長い間の御病氣から解放された小坂先生のあの熱のあるエス語が聞かれます。多數御出席を）

J. R. Scherer 氏來る

~~~~~I. C. K. の Speciala delegito として10月5日横濱着・日本滯在35日間~~~~~

セネバにある我がエスペラント運動の中心機關 I. C. K. (Internacia Centra Komitato de la Esperanto-Movado) が今回エスペラント宣傳の世界旅行を計畫してその speciala delegito として米國ロサンゼルス(Los Angeles)市の Joseph R. Scherer 氏を選定した。

Scherer 氏は本年9月15日 Los Angeles を出發の上9月18日 San Francisco に立寄り布哇(9月24日 Honolulu 着)を經て10月5日**横濱港へ**到着の豫定である。猶同氏の日本滯在は11月10日迄(同日長崎出帆)35日間程である。この間各地同志の協力を得てエスペラント宣傳講演をやりたいとの希望である。

同氏は長崎から上海，香港，サイゴン，盤谷，シンガポール，バタビヤ，ペナン，ラングーン，カルカツタ，アグラ，デルフイ，孟買，マドラス，コロンボ，アデン，エヂプトパレスチナ，アテネ，等の各地を經由して明年春南歐に渡り歐洲各地歴遊の豫定である。

我々はこれまで屢々外國のエスペランチストを送迎するの機會を得た。唯我々にとつて遺憾であつた事はエス語の世界的大家を迎へる事のできなかつた事と，エスペラント宣傳旅行といつた樣な目的をもつてやつてきた同志が一人もゐなかつた事である。勿論我々は海外からやつてくるエスペランチストは，それが商用であろうと學術研究旅行であろうと無錢旅行であろうと，そのいづれをとはず大いに之が歡迎を怠るものではないが，**エスペラント宣傳**といふ目的のみを以て我國を訪れてきたエスペランチストは一人もゐない。

所が上記 **Scherer 氏の旅行は我々の未だ嘗て經驗した事のないエスペラスト宣傳を目的としたもの**である。**しかも Internacia Centra Komitato de Esperanto-Movado** の speciala delegito として來朝されるのである。我々は同氏の壯擧を双手をあげて贊成し，同氏來朝の日を鶴首してまつものである。而して我國各地の同志諸君の協力を得て Scherer 氏の宣傳講演會をして大いに盛大なるものたらしめ我國エス運動のため一轉機を劃せしめたいと思ふ。次に同氏の講演その他についてやゝ詳細にのべよう。

* * * *

Scherer 氏の講演は:-

1. 宣傳講演(エス語にて國語譯付。一萬二千の寫眞からえらんだ幻燈映寫)。(報酬を要す)。

その内容は:

(a) 世界の樂園ロサンゼルス
(b) 映畫の殿堂ハリウツド
(c) 南加州とその商工業
(d) 南加州とその農業
(e) 赤人の國アリゾナ
(f) 自動車で米國一周
(g) 死の谷の神秘
(h) 太平洋岸メキシコからカナダ迄
(i) 神秘境瑞西
(j) 英語は世界に通用するか?

2. 上の普通講演會を aranĝi した會のために次のエス運動についての講演を無報酬にてなす。

(a) Kiamaniere organizi nian propagandon?

(b) Metodoj de praktika esperanto-propagandisto.

(c) Kiel ĉerpi sugestojn kaj ideojn por nia propagando?

(d) Organizo de Esperanto-Klasoj kaj la uzo de la rekta (paroliga) metodo de instruado.

(e) Esperanto kiel traduka lingvo en internaciaj kongresoj kaj konferencoj — Apliko, vojoj, preparado, k. t. p.

(f) Rilatoj inter la pro- kaj la peresperanta laboro. Kiel profitigi la movadon kaj vin mem el ĉiu laboro?
~~~~~

(g) Esperanto bonega, sed uzota instrumento!

(h) Nia internacia organizo; Neceseco de konstanta internacia rilataro.

* * * *

以上は同氏の講演の大要であるが

Scherer 氏の講演を arangi するには

同氏の講演は上記の如く二種類あるが，その第一の宣傳講演は主催者即ち同氏を招待した我々の側で會場費，材料費，機械使用料，滞在費等の一部分を負擔すべき事となつてゐるが，大體に於て一講演に付約 20 圓の費用ですむだろうと云つてきてゐる。つまり主催者側で20圓程の準備が必要である事を云つてきてゐる。この事については同氏到着後よく協定してみるつりであるが，會場費，幻燈使用料その他を全部こちらでもてば同氏の旅行費は負擔する必要がないと思ふ。

講演の第二部の方は全く senpage であるが歡迎晩餐會でもやつてその席上で話してもらへばよいだらう。

上の第一部の講演を催すにあたつては單にその地方のエスペランチストが金を集めあつて催すと云ふ方法をとるよりも（先方からも云つてきてゐるのであるが）この講演に興味をもちそうな會（例へば地理學會，旅行クラブ，商業學校，大學，敎育會，商業會議所，ロタリークラブ）にうまく交渉してその會場費なり講演謝禮なりをだしてもらふ事にした方が我々の monujo がいたまないのみでなくそれの方が聽衆の集りが遙かによく一擧兩得と云へるであらう。

各地方會で Scherer 氏を招待して講演を依賴したいと考へられるならば早速我が日本エスペラント學會へ御通知下さい。すべての同氏の日本旅行については同氏の依賴により我學會の手で arangi しますから。そうでないと同氏の旅行がうまくゆかないですから。大體は10月5日から11月10日迄東京から長崎へゆくわけですからその道順を考へて大體の日時をきめて當方へ御紹介下さい。

猶 Scherer 氏の身分は——スイス系の米國人で立派な事務家で，英獨佛語で立派に演説をする事ができる。（だから英語研究の會などへ交渉して通譯なしで講演してもらつても宣傳によいわけだ。）Los Angeles 市の市立高等工藝學校のエス語敎授である。

同氏の職業は同市の **Seabord National Bank** の課長である。

同氏は今回の旅行にあたつて Los Angeles 市の商業會議所ロサンゼルス港委員會及アメリカ銀行學會米國銀行家協會の後援を得てゐる。 (*J. O.*)

世界自轉車旅行家來る

佛國人 Lucien Péraire (Lusian Perer) と云ふ青年が 1928 年本國を出發して世界のエス運動の狀況を視察の意味で歐洲各國を遊歷の上シベリヤを經由して浦鹽港から8月1日伏木港へ上陸した。

高岡市の同志が早速同氏を同伴して金澤のエスペラント大會へ駈けつけたので，丁度大會第一日（8月2日）午後四時發會式に間にあつた。それから大會中は一緒に Kongresanoj と合宿した。同氏の旅行記は本誌に掲載の通りである。

同氏は8月5日から金澤をたつて富山，新潟，山形，秋田，青森，仙臺，東京とまはつて東海道を下り京都，大阪，神戶を經て山陽道を下り九州に出て長崎より濠洲へむかひたい豫定である。何分自轉車旅行故相當の月日を要する事と思ふ。同氏は自分の寫眞を賣つてそれで旅行をしたいといつてゐる。それでエスペランチストに金の心配はしてもらひたくないといつてゐる。日本食でも何でも食べるし，場合によつては野宿もする（テント携帶）覺悟だとの事である。各地同志諸君の歡迎をのぞむ。 (*J. O.*)

綠の友を求めて

在ドイツ　鈴木正夫

Dresden は流石 Saksujo の首府だけあつて Leipzig などより遙かに美しい趣きがある。又市外にも種々の多くの美しい城（昔の王様の別莊）が深い森に圍まれてる。その一つの Linguer Parko に於て三日目の夜 ĝardenfesto があつた（勿論第二日、第三日には Laborkunsido や Fakkunsido はあつたのだが僕達 fremduloj は町や ekspozicio の見物に費して出席しなかつた）。お伽噺にある樣な森と城、そこからは目の下に Elbe 川が流れその彼方に Dresden が長く横たはつて非常な好景である。玆での餘興の白眉は Mozart の Opero "Bastien kaj Bastienne" の演出で Bennemann の Esp. 譯に依り全部の歌詞を Esp. でやつた。音樂學校の生徒だ相だが服裝はもとより發音も非常に明暢で歌の調子にしつくり合ひ非常の出來であつた。その後でこの土地の Esp. を敎へてる小學校の生徒それも大抵10歳以下の男女兒童の對話や所作事や小芝居や唱歌があつたが皆 Esp. もうまく可憐で可愛いゝ事無類であつた。その校長さんや先生が例の好人物そのものの Esp. 村夫子で頻りに世話をやいて居るのは愉快である。その後は例に依て踊りで若い人々は眞夜中をすぎても仲々歸るけはひもなかつた。第四日目は Dresdeno 人の好意である市外十數里の處にある Saksa Svisujo へ Ekskurso で乘合自動車(4–50人はのれる) 6 臺程に分乘し綠星旗を風になびかして驅り廻た。古城だの北歐では珍しい山の奇景などを愉快に見て廻たのだつた。この大會で特に感じたのは歐洲の Esp-istoj には老人の多い事だ。否むしろ老人も共に Kongresa atmosfero を享樂してる事だ。勿論若い人々も多く來てた。併し年老つた夫婦などが遠い町から Kongreso を樂しみにやつて來てるのは日本などでは見られない圖である。中には70以上の老人が60以上の奥さんと一緒に來てるのなども少くない。そしてそれらの人が10年前だの5年前などからやつてるのだといふ事を云ふ。卽50歳、60歳になつてから Esp. をはじめ而も今は流暢に Esp. を話すのは彼等には我々よりは遙かに習ひ易いに違ないが併し感心すべき點だと思ふ。外國人は Esp. は割にうまくないとたかをくゝつて來たがどうして大會などに來てる連中は會話など仲々皆が達者でかなりたぢたぢの形だつた。かゝる人達の容子を見ると Esp. が全くその生活に入りきつてる事が分り Esp. の將來に明るい光を與へてくれる樣な氣がする。實際白髯の老人がその奥さんに蝙蝠傘を渡し乍ら "Ho, Mia Sinjorino" などと呼びかけてるのを見たりすると自ら朗らかな微笑を禁じ得ない。

Kongreso に就ては上の通り。Leipzig へ歸てからは毎週の會には大抵出る事にしてる。未だ二回しか出ないが玆では Kafejo で biero や kafo を呑み乍ら雜談をするに過ぎない。D-ro Dietterle, F-ino Wruberlich, S-ro Kötz, S-ro Bennemann, S-ro K. S-ino Petzold (Leipzig GEA 支部長) 等は常連である。その他若い連中も 5–6 名は來る。SAT の所謂 burĝaj Esp-istoj は數に於ても餘り意氣が上つてない。Leipzig の事や之からの出來事は何れ又追て報道しやう。(了)

ザメンホフ博士と…………發聲映畫（？）

...Fari *gramofonajn diskojn* en Varsovio oni ne povas (almenaŭ mi nenion scias pri tio). Post la Antverpena Kongreso (註: Sepa Univ. Kongr. 1911) mi *veturis* **speciale** *Parizon*, laŭ propono de la firmo Gaumont, por ke la *firmo pretigu* **fono-kinematografaĵon de mia parolado**; sed kvankam la mastro de la firmo tiam diris al mi, ke la rezultato estas tre bona, tamen mi de tiu tempo nenion aŭdis pri tio.... (Zamenhof の手紙. 27. XII. 1912 附) Originala Verkaro p. 561. から。

全生病院を訪ねて

宗近眞澄

昨日久しぶりで全生病院を訪れた。同行は約 20 名の gesamideanoj 武蔵野線秋津驛から辿る 1 kilometro ばかりの田舍道の pejzaĝo も我々 urbanoj には珍らしく又心地よい。

光田院長を始め鹽沼醫員など fervoraj samideanoj の心からの御歡待はいつもながら感謝の外はない。全くよそ氣分はしない所だと思う。

風通しのよい應接室に案內せられてわざわざ農家から取り寄せられた freŝa kaj bongusta akvomelono の御馳走になりながら院長から lepro に就いて色々お話を聽く。打ち解けた談笑の間にも何かしら深い印象を人々に與えると云うのが此の院長さんに對する私の impreso である。

鹽沼兄から「悲慘のどん底」を紹介される。之は Sieroszewski の Fundo de l' mizero を譯したもので先日出版されたばかりのもの。譯者は此の Hospitalo の malsanulo 黑川青年。鹽沼兄の僅か半ケ年程の gvido の所產としては tro granda である。此の青年が malsana lito に橫はりながらも譯を續けた話を聞いては感激せざるを得なかつた。此の本の出現は Esperanto は短時日に習得出來るものであると云う事の bona ekzemplo であると同時に Esperantisto を氣取りながらも malrapida progreso をもして居ない我々に對しては確かに一服の refreŝigilo たるを失はない。

例に依り白い上衣に白い頭巾、高足駄 (但し Havajano たる Adachi 君は足駄は穿けないので gumaj botoj を借りる) と云う扮裝で鹽沼兄に gvidi されて村巡り (實は病院巡りと云うべきであろうが筆者の受けた感じは Hospitalo よりも vilaĝo, malsanulo よりも vilaĝano であつた) を始める。

先づ廊下傳いに研究室に入る。

標本の貼紙に lepro de nazo など書いてあるのも嬉しい。reperatoj にも Esperanto を用いると聞いては益々喜ばざるを得ない。

廊下を通りながらちらつと眼に入つた Majstro の portreto と大きな verda stelo の signo。多分診察室か治療室であつたろうと思う。假令 Esp. には無關心な suferantoj に對してもあの人類愛に燃える Majstro の面差は慰めを、そしてあの Verda stelo は望みを與えずには措かないだろう。こんな感想が頭に湧く。

綠の木々。色とりどりの草花。瓜や茄子が今を盛り顏の菜園もある。

その中に點在する村の家々には人々が病む身でありながらも思い思いの仕事に餘念がない。我々の姿を見ると丁寧に會釋する。

不圖見ると立札に Florĝardeno と書いてあり dalio や lilio と Esperanto で書いた小い木の名札が澤山に立ててある。まるで Esperantujo に來た樣である。

可愛いい小豚達の小舍がある。

菓子や日用品の並べられた賣店がある。

新築中の家では大工さんが忙しさうだ。

鉋を一生懸命に使つて居る指物屋がある。凡そ普通社會百般の職業は此の村の中にも見出されると云つても過言ではなかろう。

粗末ながらも中學校もある。併し此の小學校こそ日本唯一の Esperanto を正科にして居る plej progresita lernejo である事を御記憶願いたい。

導かれるままに會堂に入る。

欄を隔てて向う側には村の人々が男女別に整然と坐つて待つて居る。

今日は月例交驩會とでも云うものが開かるのだ。

S-ro Asega の Kotan (aina vilaĝo) の話に次いで私が要求默し難く Esperanto で saluto をやつて少しばかり感想を述べる。同行の knabinoj は kantadoj の合唱や獨唱をやる。

村の blindularo からは暗誦を junularo からは harmonikoj の合唱を聞く。村の knabinaro の Esperanta kantado の Somero kaj geknaboj には全く心を打たれた。

光田院長が閉會の辭を述べられる。

村の knaboj と同行の knabinoj とが互に名殘惜しそうに Adiaŭ! Adiaŭ, Ĝis la revido! などと saluto を交はす。

至れり盡せりの Desinfektado の後應接室に歸つて此所名物のうまい poligonaĵo に舌鼓を打ち更に茶菓の饗應を受ける。

光田院長から此の村の ideala な sistemo を聞かされる。

盜まず爭はない此所こそ此世ながらの paradizo ではあるまいか。聞けば聞く程此の Utpio の生活樣式は羨ましさを增させる。此の全生病院には病院の槪念が持つ幾分 melankolia な氣持など少しもなくて明るく活氣に溢れ Espero に充ち滿ちて居る。

光田先生や鹽沼兄の lepro に對する sindonema な研究と Esperanto に對する fervora な klopodo に深い感激を有ち乍ら病院の門を出た時は十六夜月の前の暫の暗が此の村に靜かに擧がつて居た。 10/VIII/1930.

Heroldo de Esp. の三行廣告から

粟飯原　晋

54. 求職求婚の廣告

エスペラントは生きてゐる。しかも小國や弱國の國語よりは威勢よく、世界中に大手を振つて通用してゐる。ラヂオ界に於けるエスペラント使用、各國名著の飜譯刊行、エス語原作名著出版等の趨勢に見ても、更にドイツから出てゐる週刊誌 Heroldo de Esperanto に毎號二欄、三欄に亘つて掲げられる所謂三行廣告を見ても、エスペラントは生きた言葉であるとの感を益々深うする。

ヘロルドの三行廣告には世界各國の迷信や民俗ジプシー語の文法及び雜誌、世界各地の土民の勞働條件及び民族問題、各地の風習及び儀式民族の特質及び衣服等に關する通信を希望する者もあれば、行方不明者を搜す廣告もある。十八歳のちゞれ髮のスイス青年は各國のちゞれ髮の青年男女との文通を希望し、『若くて美しく且つ褐色の毛髮の熱情的なブルガリア娘』が世界の同志と愛の問題に就て意見を交換したいと廣告して居り、英國及びスエーデンの青年でスペイン語學習のためスペインの國志との文通を求めてゐるのがある。

ヨーロツパは目下年頃の娘及び年若き寡婦で洪水の如く滿ちてゐるといふのに、婦人からの求婚廣告よりも男子からのものが目立つ。國際的なエスペランチストの求婚廣告は凡そ次の如くである。

『三十四歳の男共同夫婦生活のため二十歳乃至三十五歳の國際的なる未婚者或は寡婦を求む。但し當方四、七及び十歳の三人男の子あり。九月一日までに寫眞同封御書面頂きたし。リツアニア國カウナス市郵便局留置第……號』。

『三十歳を超えたる教養あり、理想家で、カトリツク教信者なるドイツ官吏。財產あり每年大會に出席す。結婚のため未婚者或は子なき寡婦なるサミデアニーノを求む。秘密嚴守。直ちに詳細なる手紙（寫眞と共に——御返送す）を乞ふ。姓名在社 1000 番。』

『二十八歳の酒を嗜まぬ正直な獨身の職人。伴侶（vivamikino）を求む。正直な未婚者又は寡婦よりエスペラント、リツアニア語、ドイツ語、ロシア語或はポーランド語の申込を望む。申込みと同時に經歷及び寫眞御同封ありたし。返事確實。リツアニア國ラドヴイリシキス市……』。

世界的失業苦の波は勿論エスペランチストをも捲込んでゐる。彼等の深刻な求職廣告にも一貫して國際性が浮び出てゐる。

『皆樣の中のどなたか勤勉な、熱心な勞働者に繼續的の仕事を與へて下さいませんか。私はコンクリート工事を專門とするものです。既に二ヶ年間失業して居り、今では失業補償金も貰へません。皆樣何卒私を御助け下さい。私は凡ゆる仕事を喜んで致します。何卒下名へ御知らせ下さい。ドイツ國シレジア……』。

『河川改修に關し免狀所有の技術員（Diplomita teknika oficisto en riverregulada fako）、外國、特にエヂプト、オーストラリア或は他の島で職を求む。ハンガリー國ソムバテイ市……』。

『ドイツ國マグデブルグ市……モラヴエツク。フランス或はスペインに於て仕事を求む。Librotenisto-korespondisto 及び haven-laboristo の經驗あり、目下 maŝinisto』。

『二十歳のブロンド捲毛のドイツ青年、右膝不自由なるも脚を幾分引きずる丈けでよく步けます。何處ででもよろしいから易しい仕事を求めます。何卒助けて下さい。宛名は……』。

『ドイツ青年商人、得業士の免狀を有し、事務、通信及び仕切狀作製、印書及び速記の心得あり、四ヶ國語とエスペラントに通じ、數年間エスペラント運動に働きしことあり。知的にして勤勉を要する地位を求む』。

『善良で正直な注意深い家政婦のお入用の方はありませんか。殘忍且つ不貞な夫との生活は絕望と死を辿るに過ぎないと考へた自由な女が何處の國の獨身（年配の）の殿方又は鰥夫の處にでよろしいから家政婦としての地位を探して居ります。どんな仕事（針仕事、料理、家政）でも善く知つてゐます。姓名在社 70番』。

初學者の爲に

（よく使はれる文句）

A） Por demandi, respondi

1） Kiu vi estas?	1）君は誰ですか？
2） Kiel vi estas nomata?	2）君の名前は何と云ふのです？
3） Kun (al) kiu mi havas (la) honoron (plezuron) paroli?	3）貴方はどなた樣ですか。（誰人と話すの光榮（又は喜び）を持つか）
4） Mi estas nomata Jamada.	4）私は山田と申します。
5） Kion vi volas? 6） Kion deziras?	5）6）何御用ですか。
7） Mi bezonas paroli kun vi.	7）私は貴方と御話し致し度いと思ひます。
8） Mi havas ion por diri al vi.	8）チヨツト申上げ度い事がございます。
9） Ĉu vi min konas?	9）貴方は私を識つていらつしやいますか。
10） Mi ne havas la honoron vin koni.	10）私は貴方を存じ上げておりません。
11） Ĉu vi min komprenis?	11）私の言ふ事が御解りになりましたか？
12） Pardonu, mi aŭdis malbone.	12）失禮、聞きそこなひました。

【註】初對面の人等に向つて其名前を尋ねる時などは、3）を用ひた方がよろしい。又先方の言ふ事を解し兼ねた場合には、Pardonu, だけでもよろしい。

B） Por proponi

1） Per kio mi povas servi al vi? 2） Per kio mi povas esti utila al vi?	1）2）何か御用は御ざいませんか？
3） Mi estas preta servi al vi, sinjoro.	3）いつでも御用命に應じます。

C） Por peti

1） Mi havas peton al vi.	1）貴方に御願ひが御座います。
2） Ĉu vi povas konsenti je mia peto?	2）私の願ひを承知して下さいますか。
3） Mi multe bedaŭras, ke mi vin ĝenas.	3）御迷惑をかけて申譯ありません。
4） Mi efektive timas trouzi vian ĝentilecon.	4）貴方の御親切をいゝ事にして濟みません。（私は本當に貴方の御親切を濫用することを恐れます。）

【註】何か人に賴み事や尋ね事などをする場合には。1） Ĉu vi afable…. 2） Ĉu vi havus bon(kor)econ …などで始めればよい。例へば、人に道を尋ねる時には、Ĉu vi afable montrus (vi havus bonkorecon montri) al mi la vojon kondukantan al la parko? とやればよい。

D) Por konsenti

1) Jes, certe.	1) 左樣、御尤も。
2) Jes, kun plezuro.	2) はい、よろしうございますとも。
3) Mi estas tute preta servi al vi, sinjoro.	3) いつでも御用命を承ります。(貴方に仕へる用意は萬端ととのつてゐます。)
4) Estas certe, ke mi faros ĉion, kio estas ebla al mi. (ke mi klopodos laŭ mia kapablo)	4) 出來るだけの事はきつとやつて見せます。
5) Mi prenas sur min vian aferon.	5) その事柄は私が引受けませう。

E) Por malkonsenti, pardonpeti

1) Ne, ne estas eble.	1) いゝえ、出來ません。
2) Mi ne povas konsenti je tio.	2) それには同意致し兼ねます。
3) Mi forte bedaŭras, ke mi devas malkonsenti.	3) 眞に殘念ですが、御ことはりしなければなりません。
4) Senkulpigu min, mi petas, mi faris la eblon.	4) どうぞ、勘忍して下さい、出來るだけの事はやつたのですから。
5) Tio ĉi ne dependas de mi.	5) これは私のせいではないんです。
6) Kredu, ke tio ne estas mia kulpo.	6) それは私が惡いんではないんですよ。

【註】 1) の ne estas eble は簡單に neeble! でもよろしい。 3) forte bedaŭras には tre, (multe, forte) domaĝas としてもよい。 4) sen'kulp'igu (無罪にする、赦す) は pardonu と同義に用ひてよい。fari la eblon〜fari laŭeble 出來るだけやる。mi petas は bonvolu と共に日本語の「どうぞ」に當る言葉であるが、前者は概して文の終りに後者は文の始めにつける樣です。 例) どうぞお入り下さい。Eniru, *mi petas*, sinjoro; Bonvolu eniri, sinjoro. 6) kredu は「…ですよ」と駄目を押す樣な氣持。

F) Por fari kaj ricevi dankojn.

1) Mi dankas. (Dankon, Elkorandankon)	1) 有難う。
2) Akceptu de mi mian plej profundan dankon.	2) 私は衷心の感謝の意を表します。(私から最も深甚なる感謝を御受け下さい)。
3) Mi tute ne scias kiel danki al vi.	3) 本當に御禮の申上げ樣もございません。
4) Mi peze ŝuldas al vi.	4) 貴方には大變御恩になつてゐます。
5) Mi tute ne meritas vian laŭdon.	5) 私には貴方から御讃めの言葉に預る樣な資格がありません。
6) Ĝi estas nenio. (bagatelo)	6) それは何でもありませんよ。(大した事ではない)
7) Mi estas tre kontenta, ke mi povis esti utila al vi.	7) 私が貴方のお役に立つた事は、私の大變滿足に思ふ處です。

【註】 Dankon! が目的格になつてゐるのは、mi esprimas al vi… といふ文が省略されてゐると思へばよい。peze ŝuldas 重く負債を負ふ、負ふ處大なりの義。 (270 頁へ續く)

エスペラント中等講座

Rimedo Kontrau Esperantismo

(1)

En gaja secieto kuracisto iam rakontis pri la novaj rimedoj kontraŭ ĥolero. Junulo interrompis lin kaj diris:

—Vi havas rimedojn kontraŭ ĉiuj malsanoj. Sed ĉu via scienco trovis jam ankaŭ efikan rimeden kontraŭ la plej nova malsano, kiu nun vastiĝas en la mondo—kontraŭ la esperantismo?

(2)

—Kio estas esperantismo, demandis unu fraŭlino.

—Esperantismo, respondis la junulo, estas aliĝado al la nove elpensita lingvo, kiu havas la nomon Esperanto. Tiu ĉi malsano konsistas en tio, ke homoj, kiuj ĝis nun estis tute prudentaj, ricevas atakon de

(1)

【譯】或る時陽氣な會合の席で醫者がコレラに對する新しい治療法の事を話した。

若者は彼の言葉を遮つて言ふに、

「貴方は萬病の治療法を辨へてゐらつしやる。而し貴方の學問は、現に世界中に蔓延してゐる最新の病氣、曰くエスペラント主義に對する有效な治療法をも發見されましたかれ?」

(2)

「エスペラント主義つて何?」と一人のお孃さんが尋れた。

すると其若者は答へて「エスペラント主義とはエスペラントと名付ける新しく出來た言葉に加はる事です。此氣病と云ふのは、今が今迄全く思慮深かつた人々が狂氣の發作にさ

【註】(1) **societo**~kuniĝo de multe da personoj por komuna celo (kabe) 社交界、會。**rimedo**~tio, kio servas atingi celon 手段、方法。rimedo の變つた用法に Miaj rimedoj ne permesas tion.(そうするだけの餘裕がない。)がある。この場合の rimedo は寧ろ vivrimedo (生計) と言つた方がわかりがいゝ。**ĥolero** コレラ病。**inter'romp'is lin** は言ふ迄もなく。interrompis *lian parolon* である。類例) Mi lin atente aŭskultis.~Mi atente aŭskultis *lian parolon.* **scienco** 科學、學問 (綜合的)こゝでは medicino の意。**vastiĝas** 廣まりつゝある。dis'vsstigi とすると、「四方へ擴大する」意味が一層强くあらはれる。**malsano** 卽ち esperantismo. **esperantismo** こゝで云ふ

frenezo kaj komencas lerni la novan lingvon. Ili ricevas varmegon, kaj en deliro kaŭzita de tiu ĉi varmego, ili komencas paroli pri la estonteco, pri frateco de popoloj k. t. p. Ekster tio ili ricevas tre danĝeran pasion infekti per sia malsano kiel eble pli da aliaj, kaj en tio ĉi kuŝas la plej granda danĝero de tiu ĉi malsano. Oni diras, ke tiu ĉi malsano infektis jam multajn urbojn kaj landojn. Ĉu vi elpensis ian rimedon kontraŭ tiu ĉi malsano, sinjoro doktoro?

(3)

—Jes, respondis la kuracisto, mi profunde esploris tiun ĉi malsanon kaj mi havas kontraŭ ĝi efikan rimedon. La baciloj de tiu ĉi portas sin en la radioj de la suno, kaj en mallumo ili ne povas vivi. Tial la plej bona rimedo kontraŭ la esperantismo estas: Sidi ĉiam en profunda mallumo kaj allasi al si nenian radion de suno.

らはれて、其新言語を學び始めるさ云ふにあるのです。彼等はのぼせ上り、そして此のぼせの爲に精神錯亂して、やれ未來だの、やれ諸民の友愛だのを口にし出すのです。それ許りでなく、彼等は自分自身の病氣を以て、他の者達をも出來得るだけ多く感染させようさする極めて危險な熱情を持つてゐるのです。此病氣は既に幾多の都市、國土を感染させたさの事です。先生、貴方は此病氣に對する治療法を何か御考へになりましたか。」

(3)

醫者は答へて「左樣、吾輩は此病氣について深く研究をし、これに對して效果のある方法を辨へてゐます。此病氣の細菌は日光に當つては持ちこたへるが、暗がりでは生存出來ないのです。だから、エスペラント主義最良の治療法は——常に眞暗な中に坐つて、日光を少しも入れない——ことです。

---

esp-ismo は所謂エス主義でなく、「エスペラント熱」位の意。**al'iĝ'ado** 加はることゝ、參加、「言語」に加はる、さ云ふのは要するにエス語の趣旨に贊成して學び始めること。(2) **el'pens'ita** 發見された、考案された。**konsistas en tio, ke** …に存す。**atako de frenezo** 狂氣の發作卽ち發作的の狂氣。**ricevi varmegon** のぼせ上る程熱心になること。**kaŭzita de** ……に原因した。**ekster tio** それ以外に。**infekti** 感染する。**kiel eble pli da aliaj** 來出るだけもつと他の者を。**en tio ĉi kuŝas** 玆に存す。**sinjoro doktoro** 醫者に稱びかける敬稱。(3) **esplori** 探求する。**bacilo** 桿狀細菌。**portas sin** 持ちこたへる。**allasi al si nenian radion** 少しの光線をも與へさせぬ。

新刊紹介

大島義夫

★ザメンホフ、ドレーゼン著 梶弘和譯 13×19 cm. p. 118. 定價 85 錢、東京麹町エスペラント研究社發行 1930.

最近 SAT から出した。E. Drezen のの譯。(どうしたことか SAT から recenzo に送つてこないので二重分の recenzo をする)。梶氏の譯で同志、秋田雨雀の序文がのつている。

ザメンホフの生活を記したものと言えば誰しも E. Privat の "Vivo de Zamenhof" を擧げる。しかしそれわ 10 年前の Privat の homaranisma な立場から理想化して描かれた Z. の姿である。そこにわ謙讓温和の德に磨かれた非凡な凡人としての Z. が感激で充ちたの筆によつて記錄されている。

だが今、階級と階級との鬪爭が全世界を通じてもり上り、空しい人類人主義者の努力の跡がその影を日に日に薄くして行く時、われわれにわ Z. に對する新しいより正しい立場からの徹底的批判が必要だ。偶像の位置から引ずり下ろして一定の歷史的環境の下に生活した一箇の人間として、すぐれた國際語技術家として、Z. をわれわれの生活により近からしめなければならない。

この意味で Drezen の "Zamenhof" わすべての esp-isto の一讀する價値がある。本書わ單なる Z. の傳記でわなく、彼を生んだ當時の社會環境及び彼の抱いた思想の追究と國際語發達の歷史に最後の monumento を置いた卓越せる彼の國際語技術の檢討とから成つている。卽ち、第 1 篇わザメンホフ及びザメンホフの世界觀第 2 篇國際語の創始者並びに理論家としてのザメンホフ。

第 1 篇で彼の世界觀、ボンヤリした人類人主義わ徹底的に批判されている。卽ち彼の思想を當時の Tolstoj のそれと對比して、小市民階級の ideologio だとしている。が第 2 篇でわ、Z. の國際語理論に對する驚くべき理解と彼の運動に對する態度とをハツキリと浮出してわれわれに示している。

Z. 及び彼の創つた esp. に對して多く esp-isto の抱く漠然たる尊敬、無意識的崇拜を去つて、正しく Z. とその esp. とを把えるために、まじめな esp-isto の必ず眼を通さればならない本だ。

譯文わ、二三の不充分な譯語を除いてわ明快しかし內容の分量の割に活字、表裝その他が費用をとりすぎて原本の倍以上になつたのわ殘念。もつと小さい活字で簡單な體裁で出した方が望ましく思われる。しかし日本語譯の出版によつて esp. に關心を持つ人々の間に本書の廣く讀まれる機會の與えられたことわ運動の正しい發展の上から善ばしい事實だ。〔原文 Drezen: Zamenhof (35 錢、郵 2 錢) 洋書部に多數あり〕。

★"KAJ ĈIO RESTAS PENSO SED NE FARO," Originalo de Lakshmiswar Sinha, 13×20 cm. p. 14. Eldona Societo Esperanta, Stockholm. Svedujo. 1930.

Esp. によつて北歐を歩き廻つている hindo の論文。人類平和に對する esp. の役割の偉大なることを讃えてある。

★LA JUNULINO EL STORMYR, de Selma Lagerlof, trad. de el sveda lingvo, de O. Frode 13×20 cm. p. 94 Eldona Societo Esp. Stockholm Svedujo, 1930.

すつきりとした表裝も活字も氣持がよい。最近頻繁に出版しだしたスエーデン Esp. 會の出版。

作者わスエーデンの有名な婦人作家、その簡素でわあるが詩的な stilo で描かれた多くの農村小說わ國際的にその名を得ており、すでに 1909 年にわ Nobel 文藝賞を受けた由。

この作わスエーデンの農村に材を取つて、召使として雇われた上、主人の子を生んで追い放われた若い娘が多くの苦しみを經た後、純情に生きる徑路を描いてある。文體の平明流麗さわ、譯者によつて充分傳えられている。

しかし生活の豊かな農村に演ぜられた戀愛物語わ、恐慌に見舞われて日に日に荒廢し亂れて行く日本の現狀とわあまりにも隔たりがある。

Estas tre bedaŭre, ke la recenzitaj ekzempleroj estis erare binditaj, kio kaŭzis al ni malsufiĉan komprenon.

★ESPERANTO POR INFANOJ, de G. Gladstone Solomon, 14×21 cm. p. 60 eld. Esp. Publishing Co. London, Anglujo, 1930.

鼠の一家の生活を中心にしてやさしく編まれた esp. 讀本。全部 26 課に分け各課に挿畫が入り、新しい單語わ畫で說明してある。著者の手馴れた編輯ぶりわ日常生活に必要な esp. を學習するに充分だ。(約 80 錢十月着)

第十八回エスペラント大會參加記

H 記 者

八月二日　早朝金澤着、夜行列車の疲れを休めるひまもなく　綠星旗をひろがへした同志に迎へらる。„Bonvenon! bonvenon!" 其處此處に流暢なエス語がひゞきわたる、夜來の雨もからりと晴れて赫々たる太陽。今日ぞ大會日和、北陸の都金澤の街上は綠星章を胸にした同志が右往左往。淺井屋旅館に落着いて朝食。熱し切つた大會氣分は一憩をもゆるさずI氏やO氏と共に目抜きの街 (Okul-tiranta Strato) を散步する。夜行列車にゆられた東京よりの連中はれむそうな眼で開會時間を待つ。

大會の開かるべき時が來た。手に手を携へて會場へと急ぐ。各地より馳せ參じた同志は胸をとゞろかせて時の來るを待つ。意外！自轉車世界旅行家 Perer 氏が來て居るではないか、而も日本の浴衣がけで、好氣に滿ちた各地の同志に取まかれてしきりと見事なエスでシヤベりたてゝ居る。

ベルが鳴つた。大會は遂に開かれた。此の大會の爲に遠き各地から集つた我等だ。高潮した氣分の中にピアノの伴奏にて „La Espero" を合唱。

準備委員長瀨川氏の挨拶に引續き名譽會長副會長、ザ博士を思ひ起させる學會代表の大石和三郎氏の登壇。

各地代表の挨拶。

斯くして盛大な發會式は終つた。

引續き J. E. I. の總會。

金谷ホテル前にて一同記念撮影。

懇親晩餐會。樂燒に打興じ皿、湯呑み、茶わん等に繪を畫くもの署名を望むもの多々。宍戸氏の „荒城の月" の獨唱、ペレル君のフランスの民謠、唄ふもの、しやべるもの、喜々哄笑。Nohara 氏は立つて云ふ „Antaŭ ĉio atentigas vin, ĉar multe nomas min per nomo „senhara" sed mia vera nomo estas „No-hara". 更に語をついで自分の髮とエスペランテイストとの關係を語る。私が若い頃日本のエス語運動は盛んでなかつた頃私は濃い髮をもつてゐた。エス語運動が盛になるにつれて私の髮はうすくなりました……" 之ある哉。世の老人にしらしてやりたい。夜の更くると共に大會氣分は彌增したが明日を期して散會した。

✶　✶　✶

八月三日　明くれば大會第二日、宿にて朝食中ペレル君何處よりか歸り來る、れむそうな眼、だるそうな體、聞けば昨夜二三の同志に伴はれて何かで飮み明かしたのだと云ふ、兩足を投げ出して食卓に向ふ。箸も器用に持つて食ふわ食ふわ。おどろくべき食慾、地獄の餓鬼もそこのけ。

分　科　會

藥學、醫學、U. E. A. 希望社、宗敎。

夏期大學

Aerveturad-kaj Aerologio (大石氏)。

旅行談 (ペレル君)。

午後一時金澤の驛に集合し粟ケ崎海岸に到着遊園地に遊ぶもの、海岸に泳ぐもの、ボートを浮べてたわむれるもの、半日の行樂にゆかいな時をすごす。

夕食—Aĉulara kunsido. Hetmano 淸水氏の祝電、何處に於いても aĉuloj の會合はにぎやかだ、輿太。駄辨。合唱。等々　十時すぎまでさわぎ通した。

✶　✶　✶

八月四日　二日間の疲も何のものか。第三日を最後と馬力をかける。

兼六公園散步　前田公の別邸を拜觀、さすが加賀の殿樣の持物だけあつてその華美を極めたもの。夏草萠え樹立暗く繁り蟬聲徒らにこだまし寂莫の氣なつかしく漂ふ。

雄辯大會　先年東京で開かれたものより一層成績がよく　小此木君の „Socia Novelo" 金澤一中の二年生關君の „Tro multiĝo de loĝantoj" など聽衆の耳目をひいた。

夏期大學 Esperantologio 川崎氏、岡本氏。

分科會報告

協議會　來年度の大會は種々折衝の結果京都に開くことになつた。

前年の東京の大會に比して今回は地理上の關係から參加者は百名をやうやく超えたにすぎなかつたが緊張した大會だつた。

Propraj Nomoj の研究問題

～～～金澤大會夏季大學講演要項～～～

岡　本　好　次

Antaŭparolo.

a) Esperantologio 卽ち「エス語學」の研究を目的とする我々の努力は ludado でも amuzado でもない。エス語の眞の論理的發展を冀ふからである事。

b) Esperantologio の現在の發展の狀態を記錄して今後の發展に寄與する事多き川崎氏の新著『愛あるところ神あり』を推奬す。

1. Propra Nomo と固有名詞區別すべし

普通文法家はこの兩者の區別をしてをらぬが，私はこの兩者を區別すべきが至當だと思ふ。例へば Japana Maro と云ふ名前はあの「日本海」につけた名前で世界に二つとないものである。だからこれは propra nomo にちがいない。しかしこの語の要素をよくみると japana は形容詞であり maro は名詞（しかも普通名詞）である。勿論 Napoleono といふ語は固有名詞であるし，又 propra nomo である。

私は名詞その他の品詞の區別はすべて單一の語を文法的職能に從つて分類したものであるとみたい。卽ち固有名詞は unu vorto について云ふべきで Japana Maro, Hinda Oceano の如き二語以上のものよりなるものは propra nomo と云ふが固有名詞とは云はぬことにしたい。

2. 名詞を大別して二種類とする

私はエス語の名詞を分類する場合は固有名詞と普通名詞の二大別するのが最も眞先にすべき事と考へる。英語など物質名詞とか集合名詞とか抽象名詞とか分類するが，私は少くともエス語ではこんな分類は餘り必要でないと思ふ。（理由はこゝでは略す）

3. Propraj Nomoj を組立てる要素

Propraj nomoj は主として名詞（固有又は普通），形容詞，助辭の三要素から成立つてゐる。その三要素が如何なる具合に結合するかについてあらゆる場合を考へてみたい。

〔注意 1：以上の所論についての詳しいことは私と川崎君とで出した個人雜誌 "Esperantologio" 第一號を御覽下さればわかります。〕

それらの個々の實例についての問題は後日の研究にまつことゝする。

〔注意 2：以下は金澤大會の際には時間不十分のため話さなかつたものです。〕

4. Propraj nomoj と Komunaj nomoj の限界は仲々六ケ敷

Propraj nomoj は特定の單一の事物に限りつけた名前であり Komunaj nomoj は同一の種類に屬する二つ以上（無數ある事も多い）の事物につけた名稱であると云つてしまへば非常に簡單な樣であるが，實は仲々六ケ敷ものである。例へば次の樣な問題がある。

a) Napoleono Bonaparto の如き姓名に於て Bonaparto なる familia nomo は komuna nomo であるか propra nomo かの問題。（私は prop. nom. とみる。）

b) 書籍雜誌の名前は propra nomo として普通あつかはれてゐるが實際に於て，例へば "Fund. Krest. de Esp." と云ふ書籍は無數に澤山世界中にあるわけである。これでも prop. nom. か。

書籍の場合はまだ全く同一の內容をもつたものだとみれるからよいが，雜誌の名前の樣なのはどうか Revuo Orienta と云へば十年前の九月號も，今年の九月號も同じ名前であり，それがまた澤山の kopioj をもつてゐるのだがこれでも prop. nom. か。

c) japana lingvo, Kristanismo と云へば世界に一つしかないわけだから propr. nomoj で等々。

これらの問題についても大體の考へはきまつてゐるが，猶今後の研究をまつて發表したい。

Disvolviĝo de Esperanto kaj Esperantologio II

―― hodiaŭ と morgaŭ ――

川 崎 直 一

1) これわ第18回日本エスペラント大會(1930年,金澤)の Somera Universitato II: Esperantologio で述べた講演要綱.

2) 第17回日本エスペラント大會(1929年,東京)で述べた "Disvolviĝo de Esperanto kaj Esperantologio—nomo と fakto" (*La Revuo Orienta*, 1929, Okt.)の續編.

3) この文中に "川崎,「解題」(34)" のごとくあるわ,川崎直一,「**愛あるところ神あり**」の附錄:「エスペラント研究用書解題」の番號.

0. はしがき

Esperanto および Esperantologio の全體にわたつてでなく,ただ二つのことだけについてその hodiaŭ と morgaŭ を述べる.

1. Kategorieco de radiko

radiko それ自身に gramatika kategorio があるか,ないかわ Esp. 文法上の大問題である. **Fundamento de Esperanto** にもこれについてわなにも書いていないし, Zamenhof も別になんとも言つていない.「あり」とするほうの Saussure, Aymonier, Wüster, 小坂などの研究(川崎,「解題」(34), (35), (36), (49), (11); *La Revuo Orienta*, 1929)わどんどんでているが,「なし」とするほうの Ĉefeĉ 派の研究(川崎,「解題」(33))わ前者にくらべるとすくないようである. しかし最近においてもこの「なし」派の人々の聲が聞える,すなわち Stojan (*Esperanto*, 1925, Okt.), 千布(*La Esperantisto*, 1928, Aŭg.). いつたいこの「なし」派の說わごくだいたいのところだけしかできていない,かの「あり」派の Wüster, **Oficiala Radikaro** (川崎,「解題」(49))のようにその說を一々の radiko にあてはめて詳しく調べた研究わこの「なし」派にわまだできていない. ところで, Lingva Komitato わまだこの問題をどちらともきめていない. すなわち「あり」派の說も oficiala でわないことわもちろんである. 私個人としてわ「あり」派であるが,「なし」派の人々からもつと詳細な研究を聞きたいと思つている.

2. Zamenhof の著書に對する研究

Z. の著書に對するまとまつた研究としてわ, Fundamenta Gramatiko に對する Christaller の書(川崎,「解題」(2))と, **Lingvaj Respondoj** に對する Lippmann の書(川崎,「解題」(10))しかない. しかし Zamenhofaj esprimoj についてわ,イギリスの Bailey (UEA の雜誌にときどき載る. 例: *Esperanto*, 1925, Dec.)と,日本の松本清彥(*La Revuo Orienta*, 1927, Okt.—1928, Mart)があるのわ心強い. 兩者とも早く單行本になつてほしい.

それから, Zamenhof の譯書の原本がはつきりわかつていない. 例えば **Hamleto** にしても,ドイツ語の譯本よりの重譯であるとゆううわさだけで,そのドイツ語わ誰の譯したものか,どこの書店から發行されたのか,その第何版であるか,などわわからない. (**Hamleto** のごときものわ varianto がたくさんある.) そこで私わ Edinburgh の Warden (Akademio の vicprezidanto の一人)に質問したが,彼わ「私わただドイツ語譯よりの譯だと信じていた. 詳しいことわ知らない. Zamenhof の biblioteko を管理している Z. の娘である Sofia Zamenhof に聞いたらよかろう.」(1928 Dec. 8 附. 以上自由抄譯—川崎)と返事した. で Sofia Z. に手紙をだしたが,私の質問はしかたが悪かつたためか,「"Hamleto" el la angla originalo de Shakespeare ……」などごく簡單な返事(1929, Mart. 19 附)で原本についてわ詳しく書いてない. どうも彼女自身よく知らないらしい. それから,進藤靜太郎に賴んで,彼が Adam Zamenhof を訪問したとき, L. L. Zamenhof の bibliteko になにか原本と覺しき書物がないかと探してもらつたが,なにもなく, Adam Z. も Lidja Z. もなにも記憶しておらないとのことであつた(*La Revuo Orienta*, 1929, Sept. に進藤氏の記事あり). **Ifigenio** と **Rabistoj** の原本についてもドイツの Christaller わ「自分わ知らない」と返事(1929, Jan. 31 附)した. Z. の lingvajo を研究する上に,原本との對照わ有益であるのであるが,とにかく以上の樣な狀態である

263頁より

G) Por nei

1) Vi vin trompas.	1) 君は間違つてゐる。
2) Tio ne estas vera, ĉu ne?	2) そりや本當ぢやあるまい。
3) Estas malvero.	3) 嘘だ。
4) Ne povas esti.	4) 有り得ない。
5) Vi estas en la plej granda eraro.	5) 君は飛んでもない間違ひをしてゐる。
6) Nenio pli malvera (absurda) ol tio.	6) そんな嘘(馬鹿げたこと)はありつこない。

【註】 sin trompi (tromiĝi) 自らを欺く、欺かれる、誤る。(tio) ne povas esti. は「そんな事ありつこない」の意。從つて (tio) povas esti. は「如何にもありうることだ」の意。

——八月號 SFINKSA PAĜO 解答——

近藤國臣

(1) testud

(2) strig

(3) larik

(4) rap.

(5) abrikot

(6) hor+de=horde

(7) ?

(8) ros+mar=rosmar

(9) la vango, lavango

(10) ?

(11) p-av

(12) miro, piro, ciro, liro, diro, viro.

(13)
```
A M A S
M E T I
A T O M
S I M I
```

(14)
```
      M
    M E M
  M A T E N
M E T A F O R
  M E F I T
    N O T
      R
```

(15)
```
K N A B   即   K
P O R D   ち   O
L A N G        N
N U K S        S
G R E K        E
O K U P        K
V E R D        V
L E O N        E
R I N G        N
P E N C        C
```

(16)
```
K I A M ………… 1 2 6 5
G E R M A N…… 9 4 10 5 6 3
A R A N E……… 11 10 6 3 4
T O M A T……… 7 8 5 11 7
F R A T ………… 12 10 6 7

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
K I N E M A T O G R A F
```

(17) PATRIN

(18) PROBLEMSOLVADO

(19) FOTOGRAFISTO

(20) ?

(21) ANKRO……ROKAN marbordon……KORAN adiaŭon……per RONKA …KARNO de KORNA besto……AKRON de soifo……barela KRANO …KRONA diamanto.

(22)
```
K A R L O   もに   K A R L O
K A R T O   つは   K A R N O
K O R T O   さ     K E R N O
K O R N O   簡     L E R N O
L O R N O   單     L E O N O
L E R N O
L E O N O
```

(23) これは La R. O. 1925 Aŭg. に出題のもの。

(24) ?

自轉車旅行記

KELKAJ TAGOJ EL MIA VIVO.

ヘレル手記

Somero 1925, mi partoprenis universalan ekspozicion de dekoracioj en Parizo. Grandegan kvanton da eksterlanduloj mi vidis. Esperanto jam ekallogis min, ĉar tie mi vidis la okulfrapajn provojn, de la mirindaj ecoj, de l' lingvo Esperanto.

Jaro 1926. Tiam mi militservis. Dum liberaj horoj, en kazerno, mi sole, mokita de miaj kamaradaj soldatoj, eklernis nian lingvon. 6 monatoj poste en la komenco de lerno, mi jam ekkorespondis.

Majo 1927. Mi liberiĝis de militservo. Min allogis, kongreso de S. A. T. en Lyono. Mi tien iris por partopreni ĝin.

Kiam mi alvenis Lyonon mi ekvidas ke mi ne povis paroli Esperanton, kvankam mi ĉion komprenis. Vigle mi partoprenis laŭ miaj ebloj, preparon de S. A. T. Kongreso. En 3 monatoj mi ĝisfinis lernadon parolan de nia lingvo.

Aŭgsto 1927. Grandega sukceso de Esp. S. A. T. Kongreso, min entuziasmigis. Serioze mi pripensis malnovan ideon vagi tra l' mondo.

Jannuaro 1928. Mi ekefektivigis mian projekton, kiu jam estis fariĝinta firma decido. Mi ekklopodis ricevi sovetan vizon, germanan, polan, k. t. p. Malrapide funkciis tiaj klopodoj. Dume mi zorge min pretigis senbrue.

Majo 1928. En Esp. gazetaro, aperis jena anonco: „Juna germana Esp-isto, serĉas akompanonton por ekprovi mondvojaĝon. Preferinde dezirus francan samideanon.“ Senprokraste mi skribis. 2 semajnoj poste la principo de komuna vojaĝado kun Esp-isto, Posern el Germanujo, estis decidita. Julio 1928. Post 6-monataj klopodoj, mi finfine, ricevis sovetan vizon la 20-an de Julio. La 24-an mi ekforiris el urbo Lyono kun projekto almenaŭ en Sovetujon per biciklo. La plejmulte da homoj, al kiu mi konfesis mian projekton, min mokis. Tial mi foriris senbrue la 24-an matene je la 6-a. Neniu min akompanis.

Semajnon poste, mi jam gastiĝis ĉe mia kunveturonta K. Posern en urbo Döbeln (Germanujo Saksujo). Dum 2 semajnoj, ni zorge pretigis la lastajn detalojn. La 9-an de Aŭgusto 1928, ni definitive forlasis Germanujon. Celo de nia vojaĝo, estis jene definita: konigi valoron de lingvo Esperanto, kaj ĝin disvastigi kiel eble multe tra la veturigotaj landoj.

Oficiale neniu, aŭ nenia organizo sin dekontigis nin helpi. Ni do ekveturis kaj ekvojaĝis pere de niaj propraj rimedoj

Decembro 1928. Post 5-monata unua veturado, kun K. Posern, jam atingis urbon Navorasisk en Kaukaza Sovetujo.

Ni jam veturis la jenajn landojn; Germanujon, Ĉeĥoslovakujon, Aŭstrujon, Hungarujon, Polujon, Ukrainon, Krimeon.

Ĝis Polujo, la materialaj kaj moralaj kondiĉoj de nia vojaĝo estis bonaj. Ĉie ni trovis bonajn vojojn, multe da Esperontistoj, k. t. p.

Varme nin akceptis la Esperantistaro de l' urboj Radeberg, Teplits, Barm, Pardubice, Vieno, Bratislavo, Budapest, Gyonguoŝ Kolomea, Lyvov k. t. p. Por vivteni nin ni elspezis nian iam ŝparitan monon, vizitis la Esp. grupojn, kaj organizis versperamuzojn. Tamen spite tio, mono ne plu sufiĉis al ni. Ni devis elpensi alion. Dum vojaĝo, okazis al ni kelkaj malagrablaĵoj. Kiel ekzemple, ni erarvagis dum 55 horoj tra la karpataj montoj tute sen manĝo. Poste ni havis malfacilojn jam de tiu zono.

Ja iom post iom la vojaro malaperis. Tiam por ni komencis la veraj malfaciloj, kiel ekzemple, nin trafis neĝo la 12an de Oktobro en Ukraino. (?).

Dume ni spertis kun rusaj kotegozaj kutimirejoj. Trairante Krimeon dum novembra monato, ni retrovis varmecon kaj eĉ ni konatiĝis kun dezertaj emocioj; sabloj, stepoj, akvomanko, domforesto, k. t. p.

Baldaŭ ni atingis Simferupol, Sebastopol, Jalta k. t. p. Ĉapitrojn mi havas por rakonti. Jam mi sendube faros.

Post lasta danĝera aventura enkotiĝo en norda Kaŭkazio, kie nin savis la scio de Esp. ni trafis Novorasiskon. Vintro jam estis veninta. Estis jam decembra monato. Sur l' montoj neĝis. Vento blovegis malvarme. Mi singarde decidis travintri ĉi tie. Mia kamarado Posern, li preferis daŭrigi. Ni do disiĝis. Li, iamaniere atingis meze de vintro, Baku kaj eĉ Tehéran. Mi eksciis ke li ne plu sukc sis iri pluen, t. e. ke oni al li rifuzis vizon. Mi sciis ke li revenis Bakuon kaj tie travintris. Pluon mi ne sciis pri li. Liajn eksperimentojn mi profitis. Dum mia restado en Novorasisk, mi vizitis Moskvon vagonare, kaj tie elpeto de K. Lapin, SAT-ano, al mi sukcesisigis mian vizon. Turista societo, konsilis al mi, ke por iri orienten mi nur povas laŭ transsiberia fervojo. Oni havigis al mi la maksimumon da scioj pri la farota veturado.

Reveninte Novorasiskon profitante la spertojn pri rusaj vojaĉoj mi konstruigis specialan aparaton por malenkotigi mian biciklon.

La 1-an de Aprilo 1929 mi, post 4-monata restado en Novo, daŭrigis mian vojaĝon sole, al Krasnodarsk, Stalmgrad, Sarratov.

Printempe mi denove konatiĝis kun kotozaj, malbenitaj irojoj. Mi ĉeestis al glacirompiĝo de riverego Volga, poste mi ĉeestis ĝ'an superakviĝegon, multon, multon mi travivis, danĝeraj, ridindaj, komikaj situacioj. Jen rivero, ponto forestis, mi devas naĝante trovi la malprofundaĵon, por povi transiri. En la Volga regiono, mi spertis la montozan dekstran parton. Sen vojoj, kun pluvo, nebulo, k. t. p. Mi trovis tiajn malfaciloj ĝis tiugrado, ke dum tago mi veturis bicikle... 12 kmj, sen manĝo, pro domforesto. Kaj por kroni la 2-an parton de mia vojaĝo, en Urbo Sarratov, oni min kvazaŭ arestas. Dank'al K. Segal kiu savis mian situacion, oni nur igis min rapidi denove Moskvon per vagonaro, por ĝin reguligi (situacion).

Moskvon kiun mi vidis tri monatoj antaŭe, malvarme, kovrita de glacio, neĝo, sed vigla, ŝvarmante, mi retrovis nun tute nove printempe vestita. Anstataŭ griza ĉielo, nudaj arboj, mi revidas ĝojigan civiton. Ĉie estis verdaj arbarozaj avenuoj, multaj parkoj, ĝardenoj k. t. p. Novan urbon mi preskaŭ kredis retrovi.

Dum vintro la vivo tie estas vigla. Printempe ĝi bolas. Mi kredis reveni Parizon, Parizo, kun rusa stampo. 2 novajn semajnojn, senlace helpita de l' Esperantistoj, Demedjuk, Lapin k. t. p. mi bezonis por definitive reguligi la situacion, kaj viziti Moskvon. En Junio 1929 mi do daŭrigas vojaĝon al oriento. Kun celo trafi Ĉitaon per biciklo antaŭ vintro. Ĉu ĉirkaŭ 10.000 kmj ; kaj la plej mirinda demando, estas ke mi sukcesis, veturante nur per biciklo, kaj jen kiamaniere.

De Moskvo ĝis Kazan mi veturis laŭ pli malp'i veturebla vojo. Mi spertis kun rusa suno, kiu, min brulegis. Iom post iom mi eĉ spertis kun la kuloj. Ja mi baldaŭ atingis je la tiel nomata ruso „Taiga" aŭ virga arbaro. Tamen vojaj malfaciloj ne malaperis, male. Mi ja kun Siberio, ekspertis la maldensajn regionojn kie loĝitaj lokoj, troviĝas nur ĉiuj 30 kmj. Feliĉe la lando estis la plej paca, loĝantaro la plej gastema kiun mi iam renkontis. Tiel mi alvenis en Kazan. Jam de 3 aŭ 4 monatoj mi projektis konstrui aparaton kiu devus permesi al mi veturi sur reloj de fervojo.

En Sarratov mi ne havis tempon klopodi. En Moskvo, oni mokis min. La honoro estas por la Kazanaj gekamaradoj, kiuj kvankam preskaŭ konvinkitaj pri fiasko de miaj ideoj, pro solidareco, luktis kun sukceso kontraŭ administraj baroj, homaj mokoj, mona manko k. t. p. Post 1-monata laborado, klopodado, zorgoj k. t. p. mi finfine atingis celon, kaj triumfe mi konstruis mem aparaton kiu permesis al mi veturi per komuna biciklo, sur reloj. Denove oni min arestis, sed la fervoja polico, mirigita per mia sukceso, post kontrolado de miaj dokumentoj, ne nur liberigis min sed ankaŭ donis al mi permeson uzi la fervojan linion. Mi ĉi tie esprimas miajn dankojn al gekamaradoj Anommov kaj vera Kiselova kiuj ĉefe kaj zorge min tie helpis.

Julio 1929? Je la komenco de l' monato, mi forlasis urbon Kazan. Por la unua fojo, mi veturas sur reloj de fervojo, per biciklo. Dum 1 monato mi tie loĝadis por konstrui mian aparaton. Mi forlasis la urbon tute senmonigita spite la granda helpo de l' Esperantistaro. Mi tiel veturis 70 kmj sur reloj.

La morala sukceso estis grandega. Bedaŭrinde materiale ne tiom. En stacio Orsk (70 kmj post Kazan) mi frakasis ĉion ; biciklon kaj aparaton ; pro neperfekteco de tiu lasta, sur malbona difektita relo.

Jen piede, mi devas daŭrigi la vojaĝon. Tute senmone mi estis. Kvazaŭ sovaĝulo mi vagis trans arbaro.

Iom post iom mi, vendante miajn fotojn sukcesis gajni sufiĉe da mono por ripareti la biciklon. Mi tiamaniere veturis ĝis urbo Omsk, spite ĉiajn malfacilojn.

Tie, mi rakontis miajn aventurojn al Esperantistaro. K. Kulakov,

(eksmekanikisto, nun instruisto) sin proponis min helpi por rekonstrui mian maŝinon. 2 aŭ 3 tagojn, ni ambaŭ pridiskutis novan planon. Kun duobligita energio, kaj la entuziasmo kiu nuntempe karakterizas sovetanoj, spite materialaj malfaciloj, en 4 tagoj, ni konstruigis novan maŝinon, kies fotojn mi sendis al vi. Ĵus finita, mi eksperimentis la aparaton. Neespereblan sukceson mi atingis. De tiam soveta „sovaĝa" G. P. U. entuziasme, donis denove permesilon utiligi fervojon por nia servo.

Aŭgusto 1929. Aplaŭdita de la sportuloj, esperantistaj kuziozuloj, mi forlasis la urbon je fino de l' monato. Post 1 semajno mi estis en Novottibirsk, fino de Septembro en Irkutzk, komenco de Oktobro en Ĉita. En tiu sezono Transbaikalo, kaj baikalga ĉirkaŭaĵoj prezentas mirindajn pentrindajn pejzaĝojn. Unuaj frostoj kaj neĝoj, min trafis la lastajn tagojn de veturado. Tute egale (?).

Pluen mi ne povas daŭrigi. Ja en tiu ĉi epoko, konflikto Ĥino-soveta pliakriĝis. Neripozinte soveta potenco igis min reen iri. Vole ne vole (nevole kompreneble) spite la steĉcJ de l' loka Ĉita'a esperantistaro, mi retro-venas Irkutzkon. Tie dank'al nelacigebla helpado de la kamaradaro esperantista kiu havigas al mi laboron kaj loĝejon, mi travintris.

Ses neforgeseblajn monatojn, mi tre, mi tre travivis. Mi vivis la vivon de tiuj kuraĝaj, konsciaj bravaj sovetaj popoloj. Eĉ la 45° da frostoj min ne timigis. Iom post iom, l' Esperantistoj instruis pli kaj pli rusan lingvon al mi. Des pli intime mi vivis sovete. Baldaŭ konflikto finiĝs; printempo revenis. Kun la belaj majaj tagoj, mi denove komencis mian pluan veturadon. Denove reloj estis por mi, la planksavilo. 15-an de Majo 1930 mi estis en Ĉita. 20-an mi ĝin forlasis. 1 semajnon poste mi jam estis en Manĝurio. De la 15-a de Majo ĝis la 20-a mi loĝis en Ĥarbin. . . . la — de Julio mi estis en Vladivostok. Se en Transbaikalo mi vidis pentrindaĵojn, ve! En Manĝurio mi vidis apud landlimoj malĝojigajn postrestaĵoj de l' konflikto. Iam, en 1927, mi rakontis en S. vidaĵojn de Verdun-aj batalkampoj.

Preskaŭ la saman bildon mi rimarkis ĉi tie. Kaj la plej neinda demando, estas ke ĉiujn detruojn faris la Ĥinoj mem, dezertigante tiel, okupendajn regionojn por sovetoj. Tion atestas al mi, ĉiajn homojn, kiujn mi renkontis.

* * *

P. S. La celo de mia vojaĝo, estas ĉefe disvastigi la ideon de Esperanto. Mi provis verki sen tendenca inklino tiun ĉi artikolon kaj mi sendos ĝin al 2 ĉefaj esperantaj gazetoj „Heroldo de Esperanto" kaj „Sennaciulo".

Mi esperas, ke estontaj legantoj pardonos miajn stilojn erarajn aŭ neperfektajn esprimojn.

Mi esperas ankaŭ, ke ĉiuj estos toleremaj pri esprimitaj faktoj kiujn mi raportis. Mi deklaras denove, ke mi severe kaj senkaŝe skribis pri ĉiuj, kiuj ŝajnas al mi la plej interesindaj por ĉiuj.

Honestuloj min komprenos kaj tio sufiĉas al mi. L. Peraire.

通俗科學欄

日本人渡來考

藤原清人

日本人起源を論ずることは興味ある問題だけに之を壯重に扱はればならぬ。もとより野生は黄吻弱輩淺學の徒にしてこゝに一文を披瀝するは僭越ではあるが世人の蒙を啓かん爲敢へてした。勿論此の問題は向後あらゆる方面から研究されその綜合的結果が決定的價値を與ふるものである。此の一文は單に概論の要約にすぎぬ。

1. 古代の日本

traktato 論文。
Japana arkipelago 日本群島。
lulilo 搖籃(發生地のこと)。
en nebuleco 模糊として。
loko de antaŭhistoria ekoko 先史時代の遺跡。
vagemo 漂泊性。
scivolemo 好奇心。
Cuŝima 對馬。
antropologio 人類學。
Iki 壹岐。
ĉeflando 本土。
Izumo 出雲。
kontinent-tipakorpo 大陸的體質。
orient-norda 東北地方。

SCIENCA PAROLEJO

PRI LA DEVENO DE JAPANOJ

De K. FUĴIŬARA

En la lasta numero de nia gazeto „La Revuo Orienta“ mi legis la artikolon „Traktato pri la Origino de Japana Popolo“ de S-ro Tokieda. Mi ankaŭ la saman temon studas de jaroj. Kaj mi ankaŭ ne dubas ke Japana popolo estas intermiksita raso naskita el la geedziĝo inter gentoj. La traktato estas tre bone traktita. Sed mia opinio pri la temo, estas jene:

1. Antikva Japanujo

Japana arkipelago en antaŭhistoria epoko estis bela kolonio en la ekstrema oriento. Kaj tiam, kiam mia arkipelago ankoraŭ estis senhoma, sed aliaj vivestaĵoj jam estis kreskantaj multege, estis amasoj da loĝantoj tra la koreujo. Kaj ili jam de longe estis migrintaj tra la kontinento. Sed mi ne diskutas, kie estis ilia lulilo. Tamen mi pavas doni aludon, ke ĝi estus en Sudokcidenta Azio.

En bela tago oni povas rigardi la insulon „Cuŝima“ en nebuleco for de la suda marbordo en koreujo. Kiel la bela insulo ekscitis al ili aventuri! Kun vagemo kaj scivolemo, eble en serena vetero ili riskvojaĝis al la insulo per kanoto aŭ floso. Kaj poste al nia lando!

Ĉar en la insulo troviĝas la loko de antaŭhistoria epoko simile al tiu en nia lando kaj al tiu en Koreujo. Laŭ la vidpunkto de antropologio la insuloj „Cuŝima, aŭ „Iki“ ne nur estas insuloj, sed unu speco de ponto. Tial loĝantaroj el la koreujo, amasoj post amasoj, pli kaj pli, trans la maron, venis al la norda regiono de „Ĉuugoku“ de nia ĉeflando. Kaj fine ili trovis belan lokon, kaj tie komenciĝis ilia socio de tielnomata „Izumo“ gento.

Antaŭ la alveno de „Izumo“ al nia lando, aŭ en sama epoko, estis loĝanta tra la lando alia gento havanta kontinent-tipan korpon kaj haroriĉan. Precipe plimulte estis loĝanta en orient-norda regiono de la ĉeflando.

Kompreneble ili devis veni tien el alia distrikto, se oni konsentus, ke nia lando en antikveco estis senhoma. De kie, kaj kiamaniere ili alvenis al nia lando! Tio estas tre interesa problemo. Mi pruvos, hipotezinte ke ilia naskiĝloko estis la okcidenta Azio. Jam estis tre malproksima tempo, kian oni tute forgesis, kiam komenciĝis ilia delokiĝo. En tia tago ili vagadis kaj migradis serĉante nutraĵon, kun la sopirego al la oriento, el kiu leviĝas la suno. Tra la norda regiono de la orienta hemisfero ili daŭrigis sian amasan delokiĝon al la oriento. Tien kaj ĉi tien, de generacio al generacio! Sed fine ili atingis al la ekstremo de la orinta Siberio. Kaj tie iom el la migrantaroj disiĝis.

Ondoj de „Japana maro" ne povis absorbi la koron, el kiu elkreskas ilia sopirego bazita sur religio „al la oriento". Kuraĝe ili transiĝis la maron al la insulegoj „Karafuto" „Hokkaido", duope aŭ triope per malgrandaj kanotoj aŭ flosoj.

En la daŭro de ilia migrado tra la kontinento, sendube enhavis la sangojn de virinoj el mongoloj kaj aliaj gentoj. Tial blanka gento fariĝis iom malhela, flava, sed ne perdis sian prototipon kontinentan.

Eĉ alveninte en la supre nomitaj insulegoj ankoraŭ ne ĉesis ilia migrado. Ili denove al la oriento, se ne, al la sudo, fiŝante kaj ĉasante! Tiel ili trovis la sidhavan lokon tra la ĉeflando. Tiu gento estis la loĝantoj de neolita epoko en nia lando aŭ nomata Proto-Ainoj: prapatroj de nuntempa Aino-popolo. Mi ne dubas ke tiu gento iom postlasis sian sangon ankaŭ en la korpojn de Japana popolo.

Inter Aina popolo sin trovas la legendo pri „Koro-pokuguru" antaŭa loĝantaro de ilia alveno. Sed ĉi tie mi ne diskutas pri ĝi, ĉar, ŝajnas al mi, ke ĝi ne havas gravan rilaton kun la prapatroj de Japana popolo.

2. Prapatroj de Japanoj

Iom post la alveno de „Izumo"-gento amasoj da aliaj enmigrantoj venis al la norda regiono de la insulego „Kjuŝu" tra la Koreujo, migrante preskaŭ saman vojon, tra kiu venis la „Izumo"-gento. Estas supozeble, ke la enmigrantoj en si mem, dum sia vagado en la kontinento jam enhavis la sangojn de aligentanoj: Mongoloj, Tataroj, Ĉukĉoj ktp. Kvankam tiamaniere ili intermiksis unu kun alia, tamen plejparto el la enmigrantoj ne perdis sian

en antikveco 古代に於て。
hipotezinte ke … と假定して。
naskiĝloko 故鄕。
amasa delokiĝo 集團的移動。
sopirego al la oriento 東方憧憬。
hemisfero 半球。
de generacio al —, 世代から世代へ。
bazita sur religio 宗敎上に基づく。
mongoloj 蒙古族。
malhela 暗色の
sidhava loko 定住の地。
neolita epoko 新石器時代。
Proto-Ainoj 原アイノ族（繩紋式土器文化を遺した我が新石器時代の民衆）。
コロポクグル（アイヌ語で蕗の葉の下に住む人の意。但し傳說のみにて遺跡なければ人により果して存在せしや否や意見を異にする）。

2. 日本人の祖先
enmigranto 移住者。
Kjuŝu 九州。
estas supozeble 想像し得る。
aligentano 他種族の者。
Tataroj タタール族。
Ĉukĉoj チュクチョ族。
intermiksi 混淆す。

prototipon de la gento, kiu estis Tungusoj.

Kaj la norda regiono de la insulego estis la centro de la socio por tiu ĉi enmigrantoj. Tie disvolviĝis la sociema instinkto de la tiel nomata „Hjuga“-gento.

La motivo por la delokiĝo de la „Hjuga“-aŭ „Izumo“-gento kompreneble estis la manko de nutraĵo, kaj forkuro for de aliaj rasoj, sed pliprave, adorado al la ruĝa suno. (Nia nacia flago tre prave tion pruvas). Suno aŭ vulkano estis la celo de ilia adoro kaŭzita sur religio. Kaj ili fine pensis ke la suno estas plejpotenca kaj el kiu ili naskiĝis, kaj la vu kano estis la sankta loko por primitiva homaro.

La du gentoj „Izumo“ kaj „Hjuga“ estas same deveninta el Tunguso, sed dividita la centro de la politika influo. Kiel ofte okazis la malpaco aŭ interkompreniĝo! Sed finfine ili premis la manojn unu la alian. Ili estis la prapatroj de Japana popolo, tial oni namas ilin „Proto-Japanoj“.

En tia tago, kiam ekprosperis niaj prapatroj en prahistoria epoko, ofte okazis la kontraŭbatalo aŭ la ribelo de aliaj loĝantaroj en siaj distriktoj. Sed niaj prapatroj ne-intence batalis, tamen post la batalo kaptitoj aŭ sklavoj, rabitaj kaj oferitaj belaj virinoj estis enkondukata al la socio de la prapatroj.

3. Aliaj enmigrantoj aŭ vaguloj

„Negritoj“. De insuletoj al insuletoj el la sudmara distrikto riskvojaĝinte ili fine atingis la insulegon „Kiuŝu“, pere de marfluo kaj kanotoj aŭ flosoj.

„Indoĉinoj (Bjoj)“. El la mez-ĉinujo, aŭ el tiea ĉirkaŭaĵo. Ili alportis la rizon kaj kulturiloj al nia lando, kaj pliprogresigis al la terkultura popolo niajn prapatrojn, kiuj ankoraŭ estis la ĉasa-popolo.

„Indonezioj (Malajoj)“. El la sudmara-distriktoj ili venis al la insulegoj „Kjuŝu“ kaj „Ŝikoku“, same kiel la negritoj. Antaŭ sia alveno al nia arkipelago ili jam estis intermiksinta la sangojn kun aliaj gentoj, tial ili ne estis pura gento.

„Ĥanoj“. El Ĉinujo. Amasege. Kun la moviĝema pacienco ili asimilis sin al la moralo, kutimo ktp. de la socio de niaj prapatroj.

4. Notoj por konkludi

Japana arkipelago en prahistoria epoko iufoje estis la

Tunguso ツングース族。
sociema instinkto 社會性の本能。
Hjuga 日向（日向民衆と云ふも大和、高千穗民衆等と異名同族なり）。
motivo por— 移動の誘因。
adorado al la ruĝa suno 赫々の太陽崇拜。
nacia flago 國旗。
celo de adoro 崇拜の目的物。
primitiva 原始的の。
deveni 由來する。
politika influo 政的勢力。
Proto-Japanoj 原日本人（又は **Propra-Japanoj** 固有日本人とも云ふ）。

3. 他の移住民又は漂着者

Negritoj ネグリート族。
marfluo 潮流。
Indoĉinoj 印度支那族。
Bjoj 苗族。
mez-ĉinujo 中央支那。
kulturilo 耕作具。
terkultura — 農耕民衆。
ĉasa — 狩獵民衆。
Indonezioj (Malajo) インドネシア族（マレー族）。
pura gento 純粹な民族（他民族の血液を混へない）。
Ĥanoj 漢族。
Ĉinujo 支那。
moviĝema — 活動的な忍耐。
asimili sin 同化する。

4. 結論への註

prahistoria — 原史時代の。

grandega batalejo sangkovrita, kaj okazis multfoje la porekzista batalo inter loĝantaroj, kiuj intencis superregi. Sed ĝenerale estis la edeno kun riĉa nutraĵo kaj bona klimato en la ekstrema oriento. Kaj tie, oni povas supozi, ke inter feliĉaj loĝantaroj okazus ofte poligamio aŭ ekzogamio kaj infoje grup-edziĝo, pro la manko de belaj virinoj. Tial, aliflanke, oni povas rigardi nian prahistorian epokon, en kiu daŭris la konstanta geedziĝo aŭ interŝanĝo de virinoj inter loĝantaroj. Pri tio estas rakontita en la „Antikva kroniko". Grandega sang-intermikso kaj plibonigo de raso sub la naturo! kiel nun konstante okazanta en Usono la monda sango-intermikso de multaj rasoj.

La intermikso de ceteraj rasoj aŭ gentoj samtempe ankaŭ estis la kuniĝo de multaj civilizacioj. Kaj la batalo aŭ la paciĝo inter niaj praratroj kaj aliaj loĝantaroj kaŭzis al tiuj la bonajn efekton kaj sperton por superregi la tutan arkipelagon.

× × ×

La pureco de raso aŭ gento havas tendencon manki sian proprecon, kiam oni intermiksas kun alia raso aŭ gento havanta korpon diferencan. Sed ree oni povas gajni certan purecon, se ripetus intermikson aŭ geedziĝon inter si en la daŭro de tre longa tempo, en sama distrikto.

Laŭ la vidpunkto de zoogeografio la insulo estas la rifuĝejo kaj konservejo por specoj. Kaj kiam multaj specoj estas formitaj aŭ kondukitaj en tiu insulo, la kelkfoja intermikso, de generacio al generacio, kun la helpo de selekcio, sendube kaŭzas la formiĝon de nova subspeco.

× × ×

Tiamaniere, kvankam niaj prapatroj intermiksis en sia korpo la sangojn de la supre menciitaj aligentanoj: plifruaj aŭ malplifruaj enmigrantoj, tamen ili kompare povis konservi sian prototipon. Kaj fine aperis la nunepoka japano. Kompreneble efikis la naturselekto kaj evoluo de la korpo. Kaj pro klimato kaj loko aŭ pro diferenca grado de intermikso en distriktoj kaj rilato de komuniko, eĉ samaj japanoj reciproke havas varion en la korpo en diferencaj distriktoj tra la arkipelago.

(Aliaj notoj. 1. Niaj prapatroj uzis kaj fabrikis eĉ la sonsagon, kiu estas speciala al hunoj aŭ mongoloj. 2. Etnologie kaj lingvistike la rilato inter japanoj kaj koreoj nuntempaj (plue, manĉurianoj, tungusoj nunaj, mongoloj ktp.) tre multe analogas.)

batalejo — 血に採られた戰亂の地。
porekzista batalo 生存競爭。
poligamio 一夫多婚。
ekzogamio 族外結婚（原始人は一般に近親結婚を忌みた）。
grup-edziĝo 群婚。
interŝanĝo 交換。
Antikva kroniko 古事記のこと。
monda — 多種族の世界的混血。
kuniĝo 融合。
superregi 主權を握る。
civilizacio 文化。
pureco de raso 種族の純粹性。
propreco 特性。
zoogeografio 動物地誌學。
rifuĝejo 避難所。
konservejo 保存地。
selekcio 淘汰。
formiĝo 形成。
sub-speco 亞種。
mencii 言及す。
nunepoka 現代の。
naturselekto 自然淘汰。
evoluo de korpo 體質の進化。
klimato kaj loko 氣候と風土。
pro diferenca — 混淆の程度の異なるにより。
Vario 變異。
sonsago 鳴鏑。
hunoj フンヌ族。
etnologie 人種學的に。
lingvistike 言語學的に。
manĉurianoj 滿洲人。
analogi 類似す。

BATATO

Verkita de Tong-In

I

Bato, adulto, mortigo, ŝtelo, almozpeto kaj punlaboro —ĉion la plej teruran kaj malbenitan en la mondo oni povis vidi en la malriĉularejo ekster la kastelpordo 'Sepstela.'

Ili estis gefarmistoj ĝis antaŭ Bokne kaj ŝia edzo transloĝiĝis tien. Bokne, kvankam ŝi estis malriĉa de la naskiĝo, estis knabine iom korekte instruita ĉe la honesta farmkulturisto. De kiam ŝia familio devis okupiĝi en la farmo, forperdiĝis la bonordiĝo de la plenedukita patro, tamen estis fakte, ke oni povis vidi ĉe ŝi bonan kutimon pli akorditan ol ĉe la aliaj domoj de la farmistoj. En somero Bokne kune kun najbaraj knabinoj naĝis en la rivero kaj ĉirkaŭvagadis tutan tagon kun bankalsono sur la korpo, kaj tion ŝi prenis por nenio, sed ial en la koro ŝi ĉiam sentis moralan honteton.

Unu vidva vilaĝano, kiam ŝi atingis al la aĝo de dekkvinjaroj, pagis okdekspesmilojn por ŝin edzinigi Ŝia nova edzo (ĉu decus lin voki sinjoro?) estis dudekjarojn pli maljuna ol ŝi. Dum lia patro vivis, li havis

iom da bieno kaj ĝi estis sufiĉe por li. Sed en lia tago ĝi elmaniĝis de li iom post iom, kaj en la fino tio estis lia tuta havo, per kio li aĉetis la edzinon. Li estis la homo treege mallaborema. Kvankam li havis farmi pere de la maljunaj vilaĝanoj, tamen li neniam prizorgis ĝin kulturi aŭ streki post la semado. Kaj en la aŭtuno li povis iom rikolti de ĝi, sed ĝin prenis por si mem, neniam disdonis al termastro, pretekstante, ke tiun ĉi jaron oni neniom rikoltis. Kaj tial li ne povis farmi unu teron daŭre dujarojn. Dum li vivis en la vilaĝo, li tute perdis sian fidon kaj neniu al li farmigis.

Dank'al la bopatro li iel povis vivi tri-kvarjarojn post li edziĝis kun Bokne, sed nun li ankaŭ komencis malami la bofilon iom post iom, kaj nun li restas tute senfida kaj sola.

Ĉiel la geedzoj prikonsilis vivi, sed vane. Ne trovinte bonan rimedon, ili direktis sin en la urbon Pjengjang por kulii, sed tio ankaŭ estis tre malfacile por la homo tute mallaborema. Kun portilo sur la dorso li eliris sur la riverbordon por kulii kaj tie li pasigis tutan tagon rigardante la dancantan ondaron, kaj tiel povis esti kuliita? Post la tri-kvarmonata kulio ili povis havi, kia feliĉo, servistan okupon ĉe iu riĉetulo. Sed ili estis baldaŭ forpelitaj post kelkaj monatoj, ĉar neniam li forigis de si la malbenitan mallaboremecon, dume

Bokne mem diligente kaj fidele sin servis al la mastro. Kaj kiom da fojoj ŝi lin riproĉis kun akra riga do en la okulo, sed li, kiel kutime, ne povis sin liberigi de la propra inklino.

"Formetu la rizsakojn de tie, mi petas." ŝi diris al li peti helpon.

"Ĉar mi sentas dormon, ilin vi formetu." respondis li.

"Ĉu vi pensas, ke mi povas ilin formeti?"

"Dum dudekjarojn vi vin nutris per rizaĵoj, kaj tion vi ne povas?" la edzo ŝin ekmokis.

"Ĉu vi ne sentas honton tiel diri? Vi ja estas sentaŭga."

"Kion? Vi, virinaĉo. . . ."

Komencis disputo inter ili. Ili estis tial forpelitaj el la domo. Kien ili sin povis direkti? Nenie la homoj estis forpuŝitaj en la mondo. Jen oni vidas, kial oni ilin trovis en la malriĉularejo ekster la kastelpordo "Sepstela."

La homoj, kiuj sin direktis por serĉi vivrimedojn en tiu ĉi loko, havis du profesiojn; la unua estis peti almozon kaj la dua ŝteli, prostitui inter ili kaj agi malvirtojn la plej terurajn kaj kruelajn en la mondo.

Bokne sin okupis en la unua.

II

Sed ĉu oni povus doni almozon al la virino tute juna kaj deknaŭjara? "Pro kio vi, mia juna amikino, petas de mi la almozon?" tiel oni ŝin mokis. Kiam ŝi aŭdis tiajn vortojn, ĉiam ŝi diris, ke ŝia edzo estis morte malsana kaj ke si estis tiel-tiel malfeliĉa per diversaj vortoj, tamen la urbano Pjengjang'a estis tro sperta por kredi ŝin. La geedzoj estis la plej malriĉaj el ili, kiuj loĝis ekster la kastelpordo 'Sepstela'. El ili kelkaj, estinte lertaj peti almozojn, povis reveni al la domoj kun plenmano da kupromoneroj. Inter ili iufoje estis eĉ tia homo, kia eliris gajni en la nokto kaj revenis kun pli ol kvarcentspesmiloj da mono en tiu sama nokto, kaj de la sekvinta tago li komencis tabakvendejon per la mono proksime de la malriĉularejo.

Estante dekdaŭjara, Bokne havis belan vizaĝon. Kaj se ŝi, imitante aliajn virinojn en la malriĉularejo, vizitus ofte la virojn, kiuj lerte enmanigis monon, ŝi povus gajni iom da mono ĉiutage, sed kreskinta en la domo de la edukita patro, ŝi neniel povis tiel konduti.

Tial la geedzoj devis vivi malriĉe kaj multfoje ili tute havis nenion manĝi.

III

Tiam raŭpoj prosperis en la pinarbaro de la tombego

'Kiza'. Por ilin kaptmortigi la urboprotektejo elektis virinojn el la malriĉularejo. (per tio oni intencis fari bonon al la homoj en la malriĉularejo!)

Oni nur elektis kvindek, malgraŭ, ke ĉiuj virinoj en la malriĉularejo deziris, kaj Bokne estis unu el la elektitaj.

Bokne fervore kaptis la raŭpojn: sur kruta ŝtuparo ŝi sin levis al la altaj branĉoj de la pino kaj per pinĉilo la raŭpon kaj ĝin enigis en la akvujon, en kiu sin trovis veneno kun akvo, kaj dum momento pleniĝis la akvujo per la kaptitaj. Ĉiuvesperon, kiam ŝi finis la laboron, ŝi revenis al la domo kun tridekspesdekoj da pago.

Sed, dum ŝi laboradis kvin-sestagojn, ŝi trovis tre strangan aferon, ke ĉirkaŭ dek virinoj el la elektitaj faris nenion, nur babiladis kaj saltis ĉirkaŭen, sed ili ricevis la pagon pli multe ol la aliaj, kiuj fervore kaptis la raŭpojn.

La inspektisto ne nur fermis la okulojn pri ili, sed ankaŭ li de tempo al tempo babilis kune kun ili.

Iun tagon, kiam ŝi finis la tagmanĝon kaj supreniros al la pino sur la ŝtuparo, ŝin vokis la inspektisto.

"Bokne, mi havas ion por vi."

"Vi havas ion por mi?" ŝi sin turnis al li, forĵetinte

la pinĉilon kaj akvujon.

"Venu ĉi tien." li diris al ŝi, kaj Bokne silente alpaŝis al li.

"Ĉu vi ne iros kun mi tien post la monto, mia Bokne?"

"Ĉu mi havas ion fari tie?"

"Jes, vi povos scii, se vi iros tien kune kun mi."

"Mi iros volonte." kaj iom poste sin turninte al la kunlaborantinoj, ŝi diris laŭte al ili.

"Ĉu vi ne iros kun mi tien post la monto, fratinoj?"

"Ni ne bezonas iri kun vi, ĉar vi iras por plezuri." tiel ili respondis.

Kun ruĝo sur la vizaĝo ŝi denove sin turnis al la inspektisto.

"Nu, ni iru?" tiel dirante li komencis antaŭenpaŝi, kaj lin sekvis ŝi kun la kapo mallevita.

"Kia feliĉo, Bokne!" tiel kriis la kunlaborantinoj post ŝi. Pro tio pli ruĝiĝis ŝia mallevita vizaĝo.

De la tago Bokne ankaŭ apartenis al la grupo "ili faris nenion, sed ricevis la pagon pli multe ol la aliaj."

IV

De la tago, en kiu ŝi iris kun la inspektisto post la monton, tute ŝanĝiĝis ŝiaj vidiĝoj pri moralo kaj vivo. Ĝisnun ŝi neniam pensis, ke ŝi volis havi interrilaton

kun alia viro krom la propra, konsiderante, ke ĝi estas la afero de la besto, sed ne de la homo. Tial ŝi eĉ pensis, ke ŝi povus morti, se ŝi tiel kondutus.

Sed kiel stranga afero ĝi estis? Ŝi jam havis eksperimenton pri ĝi, kaj nun ŝi mem ne povis nei, ke ĝi estas la afero de la besto. Ŝi faris nenion, sed ŝi povis ricevi plimultan pagon ol la aliaj, krom tio ŝi povis ĝui grandan plezuron, kaj ĝi devas esti pli bona ol peti de la homo almozon—unuvorte nenie estis tia bona afero. Ĝi ja devas esti la sekreto de la vivo. Ekster tio, depost la afero, ŝi povis havi memfidon, ke ŝi nun fariĝis unu virino.

De tiam ŝi iom post iom komencis pentri la vizaĝon per pudro.

V

Forpasis unujaro kviete. Pli kaj pli boniĝis ŝia vizaĝo. Kaj jam la geedzoj sin povis liberigi de la mizera malriĉo. La edzo, kuŝante sur la lito, kontente ridadis kvazaŭ li havis bonan aferon. Dume ŝia vizaĝo beliĝis tagon post tago.

"Kiom da gajno vi hodiaŭ, mia najbara sinjoro?" tiel ŝi alparolis, kiam ŝi renkontis la homon, kiu ŝajne gajnis iom da mono de la almozopeto.

"Hodiaŭ mi ne povis bone gajni."

"Sed kiom da?"

"Entute nur duonon da trispesmiloj."

"Vi gajnis tre bone. Ĉu vi ne pruntedonus al mi kvindekspesdekojn?"

"Mi ne povas tiel, ĉar hodiaŭ mi...."

Se li ŝin rifuzus per preteksto, tiam ŝi salte kaptis la manon kaj diris.

"Mi jam vin trovis havanta, kaj vi neniel povas forkuri de mi. Nepre pruntedonu al mi, kiom mi bezonas."

"Mi ne povas helpi kontraŭ vi. Jes, mi pruntedonos al vi, kaj anstataŭe vi devas konsenti por mi, vi jesis?"

"Konsenti mi ne povas, ha, ha, ha."

"Se vi ne konsentus, mi ne pruntedonos."

"Ĉar mi jam konsentis, kaj kion vi plu?"

Ŝia karaktero ŝanĝiĝis en tia maniero.

VI

Venis aŭtuno. En la farmo ekster la kastelpordo de 'Sepstela' bone kreskiĝis batatoj kaj brasikoj, kiujn ĥinoj kulturis, kaj el la malriĉularejo preskaŭ ĉiu virino kun ujo sub la brako eniris en la farmon por ilin ŝteli. Bokne ankaŭ povis ŝteli iom da batatoj, interiĝante inter la ŝtelintinoj.

Iun nokton, kiam ŝi kun plena ujo da batatoj leviĝis

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

內　地　報　道

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

自轉車で世界一週

佛國の若き同志

五年計畫で自轉車にて世界を一週しエス語を宣傳しようさペレル君(24歲)は1928年5月15日フランスのリヨンを出發、ベルギー、ドイツ、オーストリア、チエツコスロヴ、アキヤ、ポーランド、ロシヤ等二萬キロな特別仕掛の愛用車に乘り或ひは鐵路な或ひは普通の路を走りつゞけ見知らぬ各地同志の心からの歡迎にゆかいな旅なつゞけシベリア經由ハルピンからウラジオを過ぎ8月1日に金澤の大會へその勇姿な現はした。

顏、腕、足はインド人のやうに陽にやけ見るからに屈强な男、エス語も流暢日本の浴衣も着、箸も持つて飯な食ふさ云ふしろもの。

七日は高岡市の同志奈良榮三氏らに見送られ富山へ、富山の同志松本つれな氏の案內にて市內見物、それより滑川町へ。同夜は田中小學校講堂にて深井正淑氏の通譯にて旅行談。

十一日午後新潟の同志久保氏宅に着、直ちに醫大橫田敎授、渡邊、榊の三氏に連れられて每日新聞社、新潟時事、新潟新報社な訪問同夜は歡迎晩餐會、十二日は街頭にて同志の後援にて寫眞賣り、十三日は縣立圖書館にて講演會、十四日は活動見物(唐人お吉)、十九日東京希望社訪問、廿日は學會な訪問。廿六日は橫濱へ。

エス語講座放送

臺北 J.F.A.K. より

(臺北通信) 7月11日より每週金曜日19時より30分間放送、講師は安田勇吉氏、テキストは氏の編になるエス語習讀本すでに五百部な出し希望者續出の盛況。

★同夜は岩瀨氏の榮轉祝賀會な水月喫茶店にて開催。7月15日大阪外語の淺井惠倫氏蕃族研究の爲來臺。カフエー・ボタンの一室に氏な招じて漫談數刻、氏の蕃通ぶりに地元の連中たぢたぢの體。

〔悲慘のどん底〕(La fundo de l' mizero の日本譯) 譯者は村山全生病院の一青年患者黑川氏、定價80錢。此の印税な病院の別天地に生活する同朋の爲に捧げ樣さ云ふ。物語りはシベリアの曠野の一角に展開された癩患者の標題通りの生活な如實に寫した小說。

第十八回日本エスペラント大會

8月2,3,4日――金澤市 (別記大會參加記參照)

東京　**アルヂエンタ・クンシード**（神田今川橋會館）銀座から移りたては何だか勝手がちがつた樣でしたがもうすつかりなれました。此處では他の客に氣兼ねする必要なく大聲でしやべれます。八月は休會、但し三日は大橋氏宅に會し夕食を共にし深更まで Verda hejmo の雰圍氣にひたり快談。

★横須賀に於ける綠化運動の最も熱心な先驅者松葉菊延氏は九州八幡製鐵所に勤務されることゝなり八月六日支部主催にて盛んなる送別會を開く。平塚から清水氏出席。

★横須賀私立電氣學校にては四月よりエス語を必須科目に編入した。

東北　**仙臺**　同時に六つの講習會。**東北大學**（桑原利秀氏指導の下に同大學講師ら）、**二高**（岩名、和田氏の下に輪讀會）、**東北學院**（菅原氏の下に二組の學生）、**東北慈惠院**（初等科、中等科）、**會話會**（每週金曜明治製菓にて）。

★新入生、講習生歡迎會が6月13日夜政岡家で開かれた、演說や歌に大いに氣勢をあげた。

★**横手**　5月7日大山幹事長以下各幹事橫手圖書館に會合エス語運動につき協議し積極的な宣傳の方法の一として雜誌 "Esperanto Jokote" と名づけて五月より發行した。

橫手カトリツク敎會のガヴリエル師は日英獨佛外數ヶ國語に堪能な篤學者なるが7月3日より師の外二名とエス語を熱心研究しはじめた。尙木曜日午後七時から研究會を開催してゐる。

中部　新潟縣**加茂町**　7月31日初等講習を終り同日19時より石角亭に渡邊、久保兩講師の謝恩を兼ね懇親會を開いた。尙每月第一第三火曜日研究會開催。

★愛知縣**瀨戶市**　**瀨戶エス會設立**　希望社瀨戶市聯盟の後援にて初等講習開始。

★**長野エス會**　夏休みを利用して大いに宣傳に努力された。同會より K 社の行爲に對する憤激文をエス文にて各方面に配布された。

★**名古屋**「エスペラント語を市內取引の文書に使ふ」「名古屋陶磁器協會から可成ハンガリヤのブダペスト等へ陶磁器が輸出されるがその往復文が英文である爲どうも取引の圓滑を缺く、ドイツ語ならよからうと先方の貿易商にあたつてみるといつそ**エスペラント**にしてもらひたいとの申出だ、それで名古屋エス協會の手を藉りて取引の圓滑を期することになつた」。★同市白木欽松氏は D-ro Robert Trogel の Esperanto kaj Kulturo（エスペラントと文化）の譯を謄寫刷りにて出版された。御問合せは同市南區洲雲町２同氏へ。

近畿　三重縣**松阪町**　6月17日20時より同志丸山氏宅にて會合、久居町より工藤氏來會。綠の atmosfero に夜の更くるを知らず快談。**松坂エス會**は8月より每金曜夜中等講議を開始し會員相互の研究を計る、用書はカルロ。

★柴山慶氏は最も保守的な京都禪宗敎界に於ける唯一の agema な同志である。去る四月五日には京都の同志數十名を花見に招待さる。最近は外國佛敎徒の爲に自費にて "La dek bildoj de bovpaŝtado" なる有名な禪宗敎義の小册子をエス譯出版せられ7月のハワイに於ける汎太平洋佛敎青年會議の機會を捉へて之を贈り世界佛敎界の綠化に努力せられつゝある。（同書は市外花園驛前佛化社發行）



6月25日
長崎高商
エス會
發會式

四國 **愛媛エス學會**は會員離散した爲斷念し五月になつて新しく普及のみを目的とする**エスペラント普及會松山支部**を確立した。本部より廣瀨武夫氏を迎へ大々的運動を開始した。講習會(別表)。講演會 5月12日 松山高等學校內(20名)、5月13日高等商業內(30名)、5月20日商業學校內(全職員)、5月22日赤十字病院內(看護婦40名)、5月24日濟美女學校內(四年生百五十名)、5月26日市役所(吏員五十名)、5月31日裁判所內(所員30名)、6月5日縣廳內(50名)、郵便局內(10名餘)等々……。

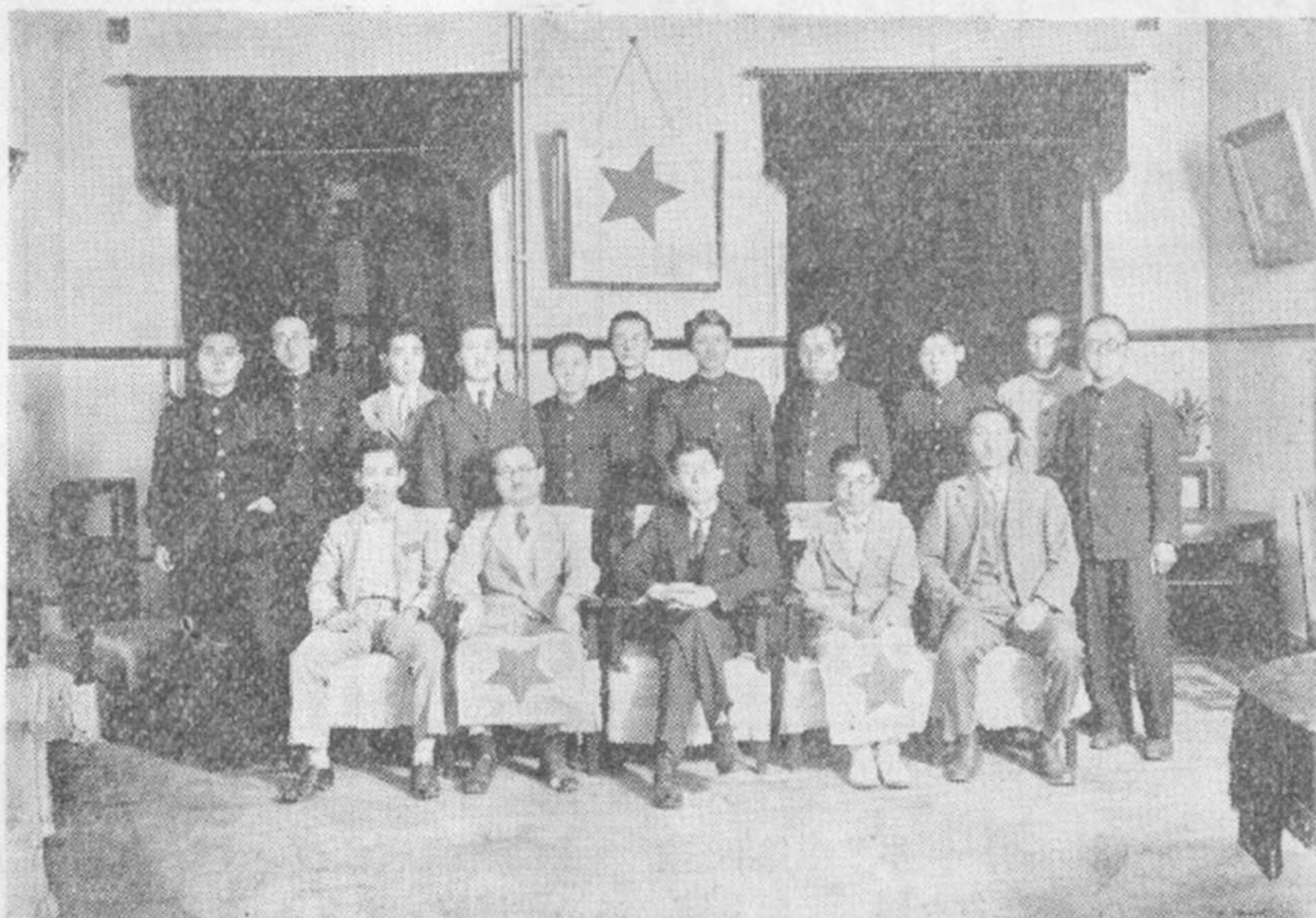
九州 **北九州 Esperantistaro** 7月28日20時より門司市希望寮にて北九州エスペランテイスターロの七月の例會。(1) 8月の日曜日を利用して會員の懇談會(海濱にて)を開くこと。(2) 九州大會に出席及大會に呈出する提案の審議。(3) 門司市に於ける希望社との結合等を語り合ひ22時半閉會。

★**福岡** 7月29日博榮館にて前九大教授藤澤親雄氏の送別會。江口幹事の送別の辭、城戸崎益敏君の激勵の辭、藤澤先生の答辭、盛會に20時閉會、因に藤澤氏は東京にて東光書院を開設東洋思想を全世界に普及宣傳する事業に着手される由。

★**長崎 高商エス會設立** 5月の初等講習終了を機として6月25日19時半より市內興善町の同窓會館で發會式、出席50名、只見校長青木、不破敎授をはじめ來賓側長崎エス俱樂部の高原氏(Historio de Esp-movado en Nagasaki) 植田敎授(短期講習を放棄すべし)その他挨拶祝辭祝電披露の後茶和會。自己照介紀念撮影、23時散會。

★**國際遞信聯盟日本代表**に近藤長崎郵便局長を推薦して來た。





〔上圖〕
7月29日
福岡博榮館にて
藤澤氏送別會



〔下圖〕
石黑氏の歡迎會

【長崎特報】 支那鎭江 U・E・A 符愷武氏は7月26日多數の同志に迎へられ來崎。夜カイダホテルにて歡迎晩餐會。同氏の渡日の目的は大體日本語學習の爲にて約六ヶ月滯在し各地の同志を訪問すると。

★臺灣文敎局長杉本良氏は公務にて7月27日來崎。夜大德園にて符愷武氏を交へ會員一同の歡迎晩餐會十一時散會。

京城 5月より京城鐘路に於ける朝鮮基督教青年會に於て朝鮮エス倶樂部を設立し、部員は毎月曜日午後7時より白南奎氏指導の下に研究してゐる。

奉天 7月9日奉天エスペランチストは滿鐵クラブに於て萬國エス大會出席の爲外遊の途にある石黒氏を迎へ晩餐を共にしてエス語座談會を開く。

全國エスペラント會一覽 (8)　累計 100

弘前エス會	弘前市北横町	高田孟泰
加茂エスクラブ	新潟縣加茂町木工試験所内	森田清明
瀬戸エス會	愛知縣瀬戸市車坂町	鵜飼鉦太郎
長崎高商エス會	長崎市同校内	廣松武夫
エス普及會松山支部	松山市大街通2の57	山本正雄

エスペラント講習會一覽

開催エス會	種類	期日	時間	用書	受講者	講師
東京・エス學會	初	6月16日—7月31日	月、木 1.5時間	短期講習書初等讀本	20	露木、平澤
大阪・エス會	初—高	7月11日—22日	毎日 1.5	新撰エス和中讀及印刷物	46	進藤、川崎、佐々木
〃 オリエンタエス協會	初	7月18日→	火、土 2	プリント	8	中野
〃 〃	中	7月15日→	月 2	Fun. Krest.	5	兒島
横手エス會	初	4月5日→	土 2	初等讀本	12	杉村、中田
瀬戸エス會	〃	8月10日—16日	毎日午前、午後	——	—	松本重一
エス普及會松山支部一般	初	5月10日—16日	——	——	30	廣瀬
市役所吏員	〃	5月28日—6月4日	——	——	20	〃
〃 松山高商	〃	5月15日—17日	——	——	10	〃
〃 松山高等	〃	5月26日—28日	——	——	5	〃
福山文化協會	〃	8月1日—5日	毎日 1.5	短期講習書	14	淺野三知
平塚エス會	〃	7日24日—30日	〃 2	〃	140	清水 中村 河合 鈴木
〃	〃	8月 →	毎日曜 2	短講の補習	50	清水勝雄
〃	中	〃	〃	Marta	15	河合鈴木
山田・希望館	初	7月10日—5日	毎夜 2	初等讀本	50	——

—— 新聞と雜誌 ——

愛媛青年	第80號	國際語問題について　山本正雄
目黒無線學友會々誌	第3號	エス會成立　ナカノ、其他エス語3よりの飜譯2篇
岩手毎日新聞	昭 5. 5. 19	I. E. A.　太田定康
曲水	6月號	日本文藝の紹介とエス譯
仙臺日々、東華新聞、河北新報	6. 4	新入生歡迎會の記事
プラジレイロ	7月號	東京A・Kの連中のよせ書

會員の聲

最近各方面にエス語熱が盛になつたのは喜ばしい次第である。いつぞやエス語による詐僞師などと新聞にも見えたが之は斯語の隆盛を裏書きするものである。エスペラントの用途に制限がない以上之をどの方面にも用ひられるわけで惡人が金もうけの爲にエスペラントの美名の下に何を行うと我々は口をはさむ餘地がない。斯語を宣傳する以上充分エスペラント主義の本質を解しての上の行動であらうから――勿論ザメンホフ自身の思想である「人類人主義」を提唱する必要は人によつてはないかもしれないが――それが廣まればそれだけ我々の使命が輕くなつたと云へる。或ひは云ふかもしれない「エスペランテイストの思想」は「ホマラニスモ」であらねばならぬと十人十色である以上人間の思想は千差萬別であり又時々に變化する。又主義思想の善惡と云ふものは誰でも自己のものを以て正しいものと信じてゐる。故に同じ Esp-isto であつても思想主義を異にするものはそれぞれ自己の好む團體を組織するは當然のことである。

そうした各違つた主義思想の團體が出來れば互ひに睨合ふことも往々有り勝ちなことだ。之は淺見な輩の持つ思想、主義から惹起されるもので時にはエスペラントの普及上に重大な支障を來すこと勿論である。私の云はんとするところは民族間のそれにも似たこれらの反感を取り棄て國際語の眞の使命を完ふするために精進せよと云ふのである。Ŝovinista-Esperantisto は云ふかもしれない「エスペラントは平和の語であるから平和の目的に用ひなければならぬ」と、云ひかへれば惡い方に使つてはならないと云ふ事に歸結する。斯うした偏狹的エスペランテイストは斯語を掲げて階級運動に加はるものには冷い眼を向けてみたり已れの屬する團體以外のものが繁榮すれば嫉視の餘り誹謗して見たくもなるものだ。

エスペラントの生れた動機は云ふまでもなくザメンホフの尊い人類愛の感情からである。――と云ふて此の感情に我々は支配される必要はない。――決して何ら非難するのではないが。斯語が世の巷に投げ出された以上もはや人類愛の感情にとらはれる必要なく、只その眞の目的に向つて各人の心に入つて行けばそれでいゝ。そして Esp-isto は Esp. の中に生活して居るのではなくして已れの心の中に此の言を生かしてゐるのである。云ひ換へれば自已を離れての Esp. は存在しない。淺薄な感激を排し捉はれない自由な Esp-isto が眞の Esp-isto だ。

只人類愛の理想に到達する手段としての言語は必ずしもエス語によるとは限らない。然し民族間の相互了解の鍵は國際語エスペラントによるのが一番近道だ。であるから Esp-を主とし homaramismo を從としなけばならない。何となれば最早搖籃時代をぬけ出したからである。ザメンホフの手をはなれたからである。或ひはマホラニスモを抱ざる Esp-isto は眞の Esp-isto でないと云ふ人があるかもしれない。私に云はしむれば斯かる人こそ Ŝovinista-Esperantisto である。

エスペラントの理想の殿堂は遠き彼岸にあるからしてせめて人類愛の理想に到達せんことを希望すると云ふものがありとすれば甚だ御氣の毒な方々である。現實に生活してゐる我々が遠き未來永劫を夢みたとて何にならう。急速に進歩する「今日、今日」の生活に喘いで居る我々にそれが我々の心の慰安となるだらうか、我々は今日此の Esp. に utopio を見出したい。我々は之を使用し明日は一人でも多く仲間をふやせばそれで我々の使命は足りるのである。

而して此のエスペラントを自已の心の中に生かせば身は飢うるも心は飢へず身は飽くも心は飽かない。此の心と明日の希望を抱けば世界は已が心の中に展開され居ながらにして世界の果の人とも心を通じ合へるのである。之は決して人類愛によるものばかりではなくして Esperanto あるが爲である。（獨我尊）

Neceso de Orienta Esperantista Gejunula Unuiĝo.

La birdoj unuiĝas kun birdoj, kaj la bestoj kun bestoj. Tio estas natura regulo. Sekve la homaro tutmonda ankaŭ devas unuiĝi unu kun la alia. Nun mi prezentas al nia „Revuo Orienta" pri la neceso de O. E. G. U. en Tokio. Ni okazu klubon, kaj kolektu la sportistojn kaj muzikistojn ktp. poste ni ekzercadu tian funkcion. Kaj organizu la karavanon por mondvojaĝi kaj elmontru nian spiriton de oriento al la tuta mondo. P. F. Satisto.

× × ×

前號二神氏の金五錢醵出の申出に丸龜市の安藤正旗氏より金五錢(郵劵)御寄贈下さいました、御禮申し上げます。

大連市陸軍々醫尾坂政男氏は八月一日より明年七月三十一日まで陸軍々醫學校甲種研究生として東京に滯在。

× × ×

全生エスペラントクルーボ

來る 9 月 28 日(日曜日) 13 時から全生病院(府下東村山村ムサシノ線秋津驛下車約十町)にて「悲惨のどん底」の出版祝賀を兼ねてエス語大會を開催、多數同志の御來院を切望。

× × ×

長らく病氣の爲御靜養中だつた小坂先生は最近すつかり健康を回復せられ九月からは役所にも出勤せられる由。從つて學會にも毎日御見えになります。

編 輯 後 記

はじめての編輯。常に雜誌の出來榮をけなして居た自分、こんどは自分がけなされる番。毎月編者が交代するのは雜誌にとつてその統一を缺くが內容に於てもその色採を異にしてくる。之は讀者にとつて甚だ迷惑なこと。と云ふて獨り專心毎月編輯に從事するはその人にとつてめいわくなこと。

殘暑の東京は焦熱地獄。編輯子は紅蓮の焰の中に居る心地。

× × ×

最近は本誌の程度をもつとやさしくせよとの投書しきりと來る。御尤も。編輯部でもやさしくしようとの意見はある。然し全部エス文にと云ふ意見もあり區々である。一方の意を滿たせば他方の御氣に入らぬと云ふ現在の本誌ではあらゆる階級を網羅した會員を統率のしようもなし。

× × ×

8 月 20 日午後突如自轉車旅行家ベレル君希望社の下村、倉地の兩氏に伴はれて自轉車ならぬ自動車にて學會を訪問、折よく居合した?編輯子と庶務の龜崎女史それから三石氏——何れもしやべる方にかけては?—先ずめんくらつた。マメだらけの手を差しのべて „Ko an saluton!" みごとなエス語が響く。人なつつこい——惡く云へば人ずれのした——ベレル君は編輯室の椅子に腰をおろし、しきりと Revuo の Scienca Parolejo が氣に入つたとほめる。(他の記事は日本語だからわからない) うす暗い編輯室の机の下は蚊軍の駐屯所。くつしたの上からベレル君の足を猛襲彼曰く „Aro da moskitoj tre ofte atakas min!" ぼろぼろの自轉車も東京でなくては修繕するひまがないと云ふ。さりとて金のひまもなし可。

× × ×

本號 „日本人渡來考" は先號の „日本人起源論" と良い對照だ。高い天狗の鼻はぶつかり易い。

淺田一博士から „產兒制限について" がとどいてゐる時節柄の讀物だ。

× × ×

24 日は希望社講堂でベレル君の歡迎會、20錢づゝ喜捨、塵も積れば山となる。東京に一週間も滯在とはさぞさぞ暑いことだらう。但し世話する人の方が。さわらぬ神に?

25日印刷所から歸る道すがら車中大空詩人永井氏に出遇ふ。例により「大空詩聞」惠贈さる。車內の視線は一樣に二人の方へ! 殘暑の一珍風景。れむけざまし。同氏の健鬪を祈る。

× × ×

本號には „海外報道" と „作文" が間に合はなかつた。御諒承を。「內地報道」は城戶崎君が歸省中の爲自分で勝手にやつてみた。講習會の報告などもつとはつきりと知らしていたゞきたい。

出來上つてみると可なりだらしがない。もう他の人の編輯ぶりを惡くは云はない。

池袋假寓にて 無花果居士。

☞ 本書を繙くこと一日遅ければそれだけ時代に遅れる！

出でたり

本書を讀まずしてエス語學を語る勿れ

充實せる此内容しかも驚くべき此廉價

愛あるところ神あり

【附錄】エスペラント研究用書解題

トルストイ原作・シドロヴスカヤ女史エス譯・川崎直一和譯並註

三五版クロース裝美本三百三十一頁　特價1圓50錢　送料6錢

本書は對譯叢書の第五篇として發行されたが，そのやり方は從來のものとは**趣**を異にし，その註釋の部は單なる**註釋にとゞめず，多くの類例をひき**，數々の理論をとき，川崎君一流の研究が**澤山織り込まれ**たもので，實に**博引旁證微に入り細を穿ち**，疑點は一々**歐米各國のエス界の大家連に質問狀**を發してその返答をまつて解決するといふ熱心さで，實に同君の精魂を打込んで完成した大著である。僅か廿數頁（五號組）のエス文の註釋が百六十餘頁（六號活字組）になつたのにみても一端が想像されよう。

附錄の「**研究書目解題**」はエスペラント語を深く研究する者にとつて必讀すべき著作百十五種について一々詳細な解題を附したもので，これだけでも**吾人の座右に缺く事のできぬ**良著である。

實に本書は初學者の好伴侶といふよりも**寧ろ中等及高等程度のエス語學究者の座右に必備の大著述である。**故に本書をそなへずしてエス語の語學的研究について云々するは「盲目蛇におぢざる」の所爲と云ふべきである。

しかも本書は植字を初めてこゝに足掛二年の歲月を閲し，著者の熱心は屢々その原稿の一部變更を必要とし，ために豫定以上の經費を要し遂に**總計一千四百圓の巨額に達した。**卽ち**一部の實價1圓40錢**である。これを二圓乃至二圓五十錢の賣價とすべきであるが此良書をして萬人の手に行き渡らしむることは Esperanto-logio（エス語學）の發達上大なる寄與をなすことを思ひ，こゝに全くの**犧牲的實費**提供を敢行する事にした。ついては學會の普通の出版書の如く部數による割引賣は〔書店に對しても〕絕對不可能である事を御承知下さい。

その内容は

(I) **いとぐち** 10頁　(II) **本文**（エス文と日本語譯文と對照）—53頁

(III) **註釋**（これが本書の骨子）——168頁（重要註釋索引を附す）

(IV) 附錄「エスペラント研究用書解題」—78頁　(V) 川崎著作目錄

【部數による割引はできません】

【東京市牛込區（振替口座番號 東京一一三二五番）財團法人 日本エスペラント學會】

學會取次洋書目錄

★洋書は如何なる場合でも前金註文でなければお送り致しません★

—— 洋書の値段は毎月變動があります ——

（九月末まで此の通りです）

【新着——再着書】

定價圓(送料錢)

★Du majstro-noveloj 古いドイツの小說家 Stom の小說二篇 „La blankĉevala rajdanto" と „Violo trikolora" …………並製 1.25（4）上製 2.10（6）

★La lastaj tagoj de Zamenhof 總てのエスペランテイストが讀むべき Zamenhof の晩年を知る好材料。…………………… 0.65（2）

★Zamenhof 本號新刊紹介にあるザメンホフの原書、一讀を奬む。………… 0.35（2）

★El la intima libro de Nerdurbaj Esp-istoj.… ………………………………… 0.30（2）

★Garbo, Asen Grigorov の原作詩. 0.20（2）

★Malriĉa Knabo, Kiu glongîis チエッコ大統領マサリック博士の傳記（5月の新刊紹介）… ………………………………… 1.10（4）

★Portreto…………………………… 0.55（4）

★Malnovaj paĝoj el la L. I.……… 0.40（4）

★Pri la origino de l' homo ……… 0.95（6）

★Reĝlando de rozoj ………………… 0.20（2）

★Stranga Idilio ……………………… 0.30（2）

★Perdita kaj retrovita …………… 0.10（2）

★Mimi………………………………… 0.40（2）

★以下絕版物殘部僅少★

★Mistero de doloro ……………… 0.55（6）

★Duonsurda ………………………… 0.15（2）

★Geedziĝopeto……………………… 0.25（2）

★Kial ili estas famaj ? ? ?……… 0.10（2）

★La fianĉiniĝo de sovaĝulineto … 0.20（2）

★La morgaŭa virino……………… 0.10（2）

★Solo de fluto …………………… 0.10（2）

★Tri monologoj …………………… 0.13（2）

★Grasa lignajisto ………………… 0.10（2）

★La senlaca sinofero …………… 0.15（2）

★Mia onklino Tateana Aleksandrovna……… ………………………………… 0.10（2）

★Rakontoj al mia belulino ……… 0.50（4）

★Urso kaj en montoj …………… 0.25（2）

ザメンホフ博士著書

★Aldono al la Dua Libro…………0.25（2）

★Rabeno de Baĥaraĥ ……………0.45（4）

★La Rabistoj ………………………0.80（4）

★La Revizoro………………………0.70（4）

★Ifigenio en Taŭrido……………0.70（4）

★La Batalo de l' Vivo……………0.55（4）

★Fundamento de Esperanto………0.55（4）

★Hamleto… ………………………0.55（4）

★Andersen, Fabeloj 第一第二卷各…0.80（4）

★Marta ……………………………1.30（6）

★Rakontoj el Biblio ………………0.30（2）

★Lingvaj Respondoj ………………0.55（4）

★Proverbaro Esperanta……………0.70（4）

★Fundamenta Krestomatio …………1.30（8）

★Georgo Dandin ……………………0.45（4）

★Originala Verkaro …………7.50 內地(27) 植民地(55)

原作文藝

★Vivo de Zamenhof ………………1.60（6）

★Saltego trans Jarmiloj …………2.85（8）

★Diablidoj …………………………0.35（2）

★Bukedo I, II. 二卷で ……………0.60（4）

★Prologo 詩集 ……………………0.40（2）

★La Landoj de Fantazio 小說…上製 2.65(12)

★Krioj de l' Koro 詩集……………0.15（2）

★Lilio, Sinotte 孃作小說…………1,35（6）

★Sep Rakontoj 小說集……………0.55（4）

★Vi, Sola, Esperanto………………0.18（2）

★Modernaj Robinzonoj ……………0.85（2）

★Karlo. Privat 著。…………………0.25（2）

★Abismoj 小說 ……………………1.55（4）

★Laŭroj 名作集……………………0.80（4）

★Du Rakontoj 小說二編 …………0.30（2）

★Stranga Heredaĵo 小說 …………2.85（8）

★Hundo Parolanta 喜劇 …………0.20（2）

燈下親しむに名著を！

★Bulgara Antologio……1.50(6)
★Bulgara Lando kaj Popolo……1.20(4)
★El la Proksima Oriento.0.90 (2)
★La Rompantoj……0.90(2)
★La Lasta……0.15(2)
★Sendanĝereco de Francujo……0.50(4)
★Tri Angloj Alilande…0.55(2)
★La Vangfrapo……0 25(4)
★Verdkata Testamento·0.90(4)
★Fatala Ŝuldo……1.10(10)
★Prozo Ridetanta……1.25(6)

飜譯文藝

★Advokato Patelin 劇……0.25 (2)
★Tradukoj el Francaj Poezioj……0.20 (2)
★Faraono (三册)……2.70 (16)
★Verdaj Fajreroj……0.40 (2)
★Reĝo Lear 沙翁劇……1.45 (6)
★Kaatje, Spaak 作の劇……0.80 (6)
★Sokrato 劇……0.65 (6)
★Karavano, Hauff 作小説……0.55 (2)
★Cavalleria Rusticana 劇……0.35 (2)
★Morto de Blanjo……0.35 (2)
★Kandid. Voltaire 著。……0.95 (4)
★Karto Mistera. Payson 譯。……0.30 (2)
★Ok Noveloj 小説集……0.55 (4)
★Elekt. Humoraj Rakontoj……0.20 (2)
★Aelita, A. Tolstoj 小説……1.70 (6)
★Kantistino, Hauff 作……0.40 (2)
★Manon Lescaut……1.10 (4)
★Ruĝa Floro……0.10 (2)
★En la Lando de Blanka Monto……0.55 (2)
★Marjo 小品……0.45 (2)
★En Okcidento nenio Nova Remarque 作……並製 2.50 (8) 上製 3.50 (10)
★Vendetta 小説……0.55 (4)
★Palaco de Danĝero 小説……3.10 (6)
★Malŝparulo 劇……1.05 (4)

【學習用書】

★Esp. Grammer and Comentary……1.90 (6)
★Oficiala Klasika Libro……0.40 (2)
★Bennemann エス獨辭典……2.10 (4)
★Bennemann 獨エス辭典……4.35 (8)
★Christaller: Esperanto……0.55 (4)
★Esperanto Teacher……0.55 (4)
★Millidge エス英辭典……4.40 (6)
★Edinburgh. 英エス、エス英……0.90 (2)
★Rhodes 英エス辭典……2.10(12)
★Petit Cours Primaire……0.30 (4)
★Maupin 佛エス辭典……1.80 (8)
★Vortaro de Esp., Kabe……0.90 (8)
★Etimologia Leksikono……2.00 (6)
★Kompleta Gramatiko……並製 2.10 (4) 上製 2.70 (8)

科學社會宗教其他

★Laborĉarto 勞働大憲章……0.12 (2)
★Kormalsanoj 心臟病……0.40 (2)
★Evoluo de Telefonio……0.55 (2)
★Franca Gramatiko……0.30 (4)
★Evangelio de Horo……0.08 (2)
★Elementa Fotografa Optiko……0.30 (2)
★Varmkulturo 熱療法……0.45 (4)
★Naciismo……0.65 (4)
★Monadologio de Leipniz……0.10 (2)
★Teknika Vortareto 教育、心理學…0.20 (2)
★Internacia Farmacio……2.20 (18)
★Fundamento de Kvakerismo……0.95 (6)
★Internacia Kantaro Tekstaro……0.80 (2)
★Internacia Radio Manual……0.15 (2)
★International Language……0.25 (2)

★第九回日本エス學會正維持員芳名發表★

森岡政治	尾崎保	中野宏造	河野英夫
平野利助	鈴木力衞	兒島壯市	赤池安好
上田嘉三郎	天野達郎	志方義一	田畑豐
藤井永造	宮田綾子	角田信一	江澤清
里井勝已	森戸忞作	島崎敏一	石丸晃
鵜飼鉦太郎	加藤弘造	山科二郎	清水强
廣瀬欣二	小西精吾	宮田正彦	水谷定久
桑原利秀	藤原七郎	山本修	粟津三郎
猿渡克治	野崎忠治	黒崎光一	林美子
渡部毅	武藤梅吉	小野崎幸彦	山鹿泰治
勝見清治	福喜田脩	宍戸圭一	伊美哲男
丸山清江	神尾碧堂		

新贊助維持員
明治藥專エス會

NOVA ELDONO

GRACIA — *Historia Dramo* —

japanlingve verkita de K. Fujisaŭa esperantigita de M. Hata kaj T. Murakami.

……[12×18 cm. 20 paĝoj. Prezo 0,7 svis fr. (afr.)]……

La dramo temas pri la tragedia morto de Gracia, la edzino de tiama daimio, kiam la ŝoguna regado de Tojotomi estis disfalonta kaj tiu de Tokugaŭa estis sekvonta ĝin.

La dramo montras la decideman spiriton de edzino de japanaj malnovaj kavaliroj.

Traktato pri la Origino de Japana Popolo

japane verkita de Motojuki Tokieda, esperantigis N. Hiraoka.

……[11×15 cm. 16 paĝoj Prezo 0.3 svis fr. (afr.)]……

La traktato montras tre simplan sed tre originalan teorion pri la miksiĝo de koreaj virinoj kaj sudmarinsulaj viroj. D-ro G. J. Ramstedt, prof. de universitato Helsinki, kaj fervora esp-isto, aprobas la teorion kaj sendis al aŭtoro laŭdan leteron.

Seslingva Vortareto de Medikamentoj laŭ japana Farmakopeo

esp.—lat.—jap.—germ.—angl.—fr.

9×18 cm. 210 paĝoj. **Prezo 4.5 svis fr. (afr.)**

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

Ŝin-ogaŭa-maĉi, Uŝigome, Tokio

＝＝［新　刊］＝＝

★グラシヤ 史劇 藤澤古雪原作 畑、村上共譯 價20錢 稅2錢

本誌三月號から連載の細川忠興の妻グラシヤの悲劇を今夏九州エス大會に際し九州エスペランチスト聯盟叢書第一篇として出版。

★日本民族の起源 時枝誠之論文 平岡昇譯 價10錢 稅2錢

本誌8月號に掲載の時枝氏の論文日本民族は朝鮮系の女性と南洋系の男子との結合によつて由來したものとなす論文のエス譯。

財團法人 日本エスペラント學會

東京市牛込區新小川町3の15 振替口座東京一一三二五番

本邦で出版の 學會取次書其他目録（註文は前金に限る）（學會の振替口座は東京11325番）

	價圓	送錢		價圓	送錢
★ザ博士演説集（カニヤ版）	0.80	.4	★新覺王（エス文）	0.30	.2
★夜の空の星の如く（同上和譯）	0.80	.6	★惡夢（エス文）	0.20	.2
★ザ博士演説集（佐々城氏編）	0.30	.2	★大成和エス辭典	4.80	.18
★我國における外國語問題とエス語	0.60	.4	★模範エス會話	1.20	.4
★心の片隅	0.50	.2	★寡婦マルタ（改造文庫）	0.30	.4
★詩集花束	0.80	.4	★カルロ（四方堂版）	0.20	.2
★綠の星に憧れて	1.20	.8	★ザメンホフ（ドレーゼン）梶氏和譯	0.85	.6

◆日本語エスペラント小辭典（三高）［普及版］（(値下)）……0.50 .2

◆模範エスペラント獨習（秋田、小坂共著）〔普及版〕……1.00 .8

◆日・エス・支・英 會話と辭書……〔普及版〕0.65 .6 〔上製〕0.85 .6

◆エスペラント絹ハンケチ（高級刺繍）……綠星光下の地球、旭昇る富士山の二種あり。（男女別申出の事）各1枚75錢送料各2錢

★エス・羅・日・獨・英・佛 藥品名彙（南江堂版）……1.50 .6

——醫藥學エスペランチスト必携 詳細は本誌八月號廣告を見よ！——

【見本は東京市本郷區春木町南江堂へ請求の事】

『新撰エス和辭典』

◁特製版發賣▷

［定價80錢——送料2錢］

最上等の濃綠色の革を使用したもの天金を施した極めて上品優雅なものです。

新撰エス和辭典普及版

定價60錢——送料2錢

東京牛込新小川町 財團法人 日本エスペラント學會 振替口座東京11325番

……文庫係よりお願ひ……

文庫整理の都合がありますから圖書を借出された方は

—— 至急御返戻下さい ——

レヴオ六月號［科學特輯號］特別に一部十錢（送料共）の割で希望者に頒つ

La Revuo Orienta——Monata Organo de **Japana Esperanto-Instituto,**
Ŝin'ogaŭamaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo ; abono internacia **7** svis. frankoj.

昭和五年九月一日發行(毎月一回一日發行)エスペラント研究雜誌ラ・レヴオ・オリエンタ第十一年第九號

本誌購讀料(郵稅別)

一部	圓0.20	學會維持員には無代頒布す
半年分	圓1.20	
一年分	圓2.40	

本會振替口座番號
一般 東京 11325 番
會計用 長野 3283 番
基本金專用 東京 32089 番

昭和五年八月二十五日印刷
昭和五年九月一日發行

編輯兼發行人 東京市牛込區新小川町三ノ一五 大井學
印刷人 東京市神田區三崎町三ノ一四六 高見澤保芳 (一國印刷所)
發行所 東京市牛込區新小川町三ノ一五 財團法人日本エスペラント學會

定價貳拾錢(送料貳錢)